医学研究科

Graduate School of Medicine

Ⅰ　理念･目的･教育目標

医学研究科博士課程の研究・教育理念は、建学の祖である福澤諭吉の「実学の精神」、「独立自尊」、「半学半教」の精神に加えて、北里柴三郎初代医学部長の「大教室制の導入」と「基礎医学と臨床医学の連携重視」の方針のもとに、教室内および教室間での不断の交流と基礎と臨床相互の活発な共同研究を通して、独創的な研究活動・研究指導を行うことができる能力と豊かな人間性・学識を持つ優れた医学研究者および教育者の育成を目指すことである。一方、近年の急速な科学技術の進歩により、医学・医療の関連分野においてもより高度な知識と技術が要求されるに至っている。特に医学・医療の基礎となる製薬・薬品会社やME機器・遺伝子工学関連企業などで、医学・医療の基礎知識を備え医療の実践について学んだ人材が望まれている。このような観点から、医学研究科修士課程では、国民の健康と福祉を担い、医学・医療の実践と研究・教育を行う人材の養成を目指している。これらの理念のもとに医学研究科における博士課程や修士課程を修了し、研究・教育の分野において指導的な役割を担える人材を育成してきた。特に21世紀COEの獲得により、医学研究科博士課程の学生や教員の増員と設備の充実が進むとともに、修士課程から博士課程への連動も促進され、より多くの人材育成が可能となっている。

Ⅱ　教育研究組織

医学研究科博士課程は基礎系と臨床系から構成され、基礎系の3専攻系（生理系、病理系、予防医学系）と臨床系の2専攻系（内科系、外科系）に合計33研究分野が含まれる。近年の学問領域の拡大・複雑化に対応して、広い学問分野での研究活動の活性化と学位申請論文の的確な審査のために、2003年度より薬剤学、臨床検査医学、救急医学、歯科・口腔外科学の4研究分野を増設した。これにより、医学研究科はより充実した組織形態をとることができるようになったと考えている。

Ⅲ　教育研究の内容･方法と条件整備

Ⅲ－1　教育・研究指導の内容等

(1)　教育課程

・　建学の精神や学部等の理念･目的のカリキュラム編成への体現

大学院博士課程の教育では、主科目（25単位以上）と副科目の「大学院特別講義」（3単位）を必修履修科目とし、選択履修科目として「実践的技術習得コース」を設け、実践的な研究実行能力の育成を行っている。また、「慶應医学会例会」、「総合医科学研究センターセミナー」、「大

学院連携化を目指した複合・多重化コース」、などの選択科目を開講しており、研究科の理念・目的である「教室内および教室間での不断の交流と基礎と臨床相互の活発な共同研究を通して、独創的な研究活動・研究指導を行うことができる能力と豊かな人間性・学識を持つ優れた医学研究者および教育者の育成」を反映したカリキュラムとなっている。修士課程では、必修科目（生命倫理学、人体構造学、人体機能学、分子医学、病理・病態学、臨床医学概論、社会医学、immigration program、医科学特別研究）を中心として、多様な進路に対応して、30 科目の選択科目が開講されており、修士課程の設置目的である「国民の健康と福祉を担い、医学・医療の実践と研究・教育を行う人材の養成」を目指して、専門職種と関連の深い医学・医療分野の現状と今後の展望を把握できるようにカリキュラムが編成されている。博士課程の教育内容は医学部学士課程の教育内容と十分な連動をもっており、博士課程進学者は学士課程での教育を十分に身に付けていることを前提としている。このため、医学部以外からの修士課程進学者に関しては、学士課程での講義が聴講できる制度を導入している。

・　専門的科目･教養的科目･外国語科目等の量的配分

大学院修士課程や博士課程では、特に外国語教育科目をカリキュラムとして設定していないが、「慶應医学会例会」、「慶應医学賞受賞講演や国際シンポジウム」、「総合医科学研究センターセミナー」「COE 公開シンポジウム」などで多くの英語による講演があり、学生はこれらの講演に積極的に参加することにより普段から外国語に触れている。

・　必修･選択科目の量的配分

大学院修士課程では、主として 1 年生時に 8 科目 15 単位を必修科目として受講し、2 年間を通して修士論文作成のための医科学特別研究（6 単位）を必修とし、選択科目として設置した 5 群 30 科目から 15 単位以上を選択科目に指定しており、必修と選択科目の量的バランスは適切と思われる。さらに、必要に応じて医学部や他研究科の開講科目を聴講することが可能となっている。一方、博士課程では多数の選択科目を開講しているが、必修履修科目は主科目と「大学院特別講義」に限定しており、実践的に研究課題を遂行できるように配慮されている。

・　学部横断的カリキュラムの実現状況

2003 年度より、生命科学ＣＯＥプログラムにおいて、研究科横断的カリキュラムによるシステムバイオロジー研究者の育成プログラムが行われている。理工学研究科（矢上キャンパス）、政策メディア研究科（湘南藤沢キャンパス）、先端生命科学研究所（鶴岡キャンパス）と医学研究科（信濃町キャンパス）の４拠点を遠隔講義システムで結んで、システムバイオロジー関連の講義が定期的に行なわれ活発な質疑応答が行われている。医学研究科の大学院生は毎回２０名程度の参加があり、医学の専門分野領域に限らず、情報科学との境界領域を含む幅広い教育がなされている。2004 度以降も、引き続き同システムを活用して、システムバイオロジーの研究者の養成を進めていく予定である。システムバイオロジーは、分子レベルの情報を統合して生命現象をシステムとして理解し、制御することを目指す新しい学問分野である。本プログラムにおいては、遠隔講義システムを活用することにより、情報科学やコンピューター科学等の専門家による講義と討論が可能であり、従来の研究科単位の縦割り型の教育では期待できなかった効果が上がりつつある。

・　「国際化等の進展に対応するための外国語能力の育成」のための措置

大学院博士課程では、「慶應医学会例会」、「総合医科学研究センターセミナー」、「慶應医学賞受賞講演や国際シンポジウム」、「COE 公開シンポジウム」などで行われる英語での講演の聴講・質疑応答に加えて、一部の非公式なセミナーとその質疑を全て英語で行う試みがなされている。また、一部の教室においては、定例の研究討論会等を英語で行っている他、著名な外国人研究者が来校した折りには、大学院生を中心とした若手対象のランチタイムフリー討論会を企画して、英語によるコミュニケーション能力の育成に努めている。

・　社会の動きに対応した特色ある教育への取組み、あるいは倫理教育への取組み

2001 年に建設された総合医科学研究センターにおいては、本学の基礎・臨床医学研究系、学外の研究機関、生命科学領域の企業・ベンチャー企業などが一体となった融合研究の推進機構（信濃町キャンパスリサーチパーク）が運営されている。このような環境のもとに、大学院生は学外や企業研究者と自由に交流しており、研究成果の製品化プロセスや特許取得などに関する積極的な学習を通して、起業家的能力を身に付けている。また、生命倫理学教育の重要性に鑑み、本塾生命倫理委員会のメンバーと学外の専門家を講師に迎え「生命倫理学講座」を開講している。

(2)　高･大連携への取組み

(3)　国家試験への対応

(4)　医学系･看護系のカリキュラムにおける臨床実習･臨地実習の位置付け・運営方法

(5)　インターンシップ

(6)　国内外の他大学との単位互換の状況と今後の課題

大学院博士課程では、国内外での研究機関や他大学の大学院において研究に従事できる制度があり、最長１年間は休学することなく留学することが可能である。毎年若干名が研究目的に適応した研究施設において研究するために、米国をはじめとする各国に留学している。

(7)　外国人留学生、帰国生、ニューヨーク学院からの進学者などに対するカリキュラム上あるいは教育指導上の配慮

国外からの医学部学生および大学院進学者に対するカリキュラム上・教育指導上の配慮は特に行っていない。

(8)　外国人留学生の受入れ･国際プログラムの実施の状況

大学院博士課程では、これまで外国人留学生の受入れ国は中国が主体であり、留学生が少ないことが問題であった。その理由の一つとして、外国人の大学院入学試験では英語に加えて日本語の外国語試験を課していたことがあげられる。そこで、2004 年度からは日本語試験を廃止し、英語試験のみとすることで対応している。

(9)　障碍をもつ学生への教育上の配慮

障碍をもつ医学部および大学院学生への教育上の配慮は特に行っていない。

(10)　社会人の再教育･生涯教育の実施状況、また社会人学生に対するカリキュラム・研究指導上の配慮

大学院修士課程および博士課程とも社会人学生はとっていない。

Ⅲ－２　教育・研究指導方法とその改善

(1)　教育効果をより適切に測定（評価）するための工夫改善への組織的取組み

大学院博士課程では、３年生時に履修内容審査を行っており、その際に学生の知識の修得状況と研究の進行具合を複数の研究科委員が評価しており、残る課程時間内でスムーズに研究遂行できるように教育・指導している。

・修士課程、博士課程修了者の進路状況
医学研究科における修了者の進路状況は下表の通りである。なお、博士課程大学院生の多くは臨床医であり、修了後は大学助手として大学に残ることが多い。

医学研究科修士課程修了生進路先一覧

修了年度	2000 年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度
修了者数	9	11	10	14
就職者数	5	5	4	7
就職先	日本テレビ、武田薬品、大林組、(株)オービック、中央労働災害防止協会	三菱化学BCM、慶應義塾大学病院、広尾病院	関東化学、中外製薬、オルガノ、BASF ジャパン	ソニー、大鵬薬品、杏林製薬、ジョンソン アンドジョンソン、BML
進学者数（博士課程）	2	3	5	7
その他	2	3	1	0

医学研究科博士課程修了(単位取得退学)生進路先一覧

修了年度	2000 年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度
修了者数	26	15	30	36
大学教員	22	15	26	33
（医師）	(19)	(12)	(20)	(33)
研究機関等	1	0	0	3
その他	3	0	4	0

(2)　成績評価の厳格性･客観性を確保するための仕組み

ア　大学院における履修科目登録については、博士課程については、各人の将来展望・希望が常に多彩であるため、上限の設定は規則としては定めていないが、過大とならないよう、指導教授と相談のうえ個別に決定している。修士課程については、年間２０単位を超えるような場合には無理をしないよう担当者から助言している。

イ　学生の質の検証･確保を行うために、大学院においては、各指導教授が定期的に担当大学院生の学力を検査し、質の向上に努めている。また、課程修了のために、博士課程は履修内容審査を、修士課程は審査委員会での二回にわたる論文審査（公開一回、非公開一回）を課している。

(3)　適切な履修指導または効果的な研究指導を行うための制度・工夫

医学研究科において、適切な履修指導、効果的な研究指導を行うためには、まず大学院生が、大学院医学研究科の目的、すなわち大学院修了時に到達すべき目標について、常に意識するように働きかけ、漠然と「学位をとること」を目標とすることがないように指導している。「学位を持つこと」の意義を明示し（例えば「自分で独立して研究を立案し、遂行し、検証できる能力を持った研究者となること」など)、大学院生のモチベーションを高めることを重視している。いずれの制度・工夫においても、講義を担当する教員、研究を指導する教員と学事課との密接な連携、情報交換が行われるように徹底している。

ア　教員間･学生間およびそれら双方の学問的刺激を誘発する仕組み

医学研究科の大学院生は、学部学生または臨床研修医を経て研究生活に入る場合が多く、はじめから研究に必要な学力を身に付けていることは少ない。したがって、講義は研究に必要な基礎的学力（生化学、分子生物学など）を養うことと、最先端の研究がどのように行われているかを学ぶことを目標としている。研究のための基礎学力を養うための講義では、教科書を指定するなどして、均一でもれのない授業が達成されるように配慮している。一方、最先端の研究に関する講義では、教員がもっとも得意とする自己の研究テーマとその関連分野について、実際の研究活動に近い内容をわかりやすく講義するように努めている。特に医学 COE と関連の深い発生・再生医学分野については、学内外の専門家を招いて、各々の分野における最先端の講義を学部教育と連動しつつ行っている。本講義シリーズは、講師陣と内容の充実さから、学部学生の他に多数の大学院生や教員が自主的に聴講しており、活発な議論の場となっている。

イ　個別的な研究指導を充実させるための方策

指導教員が、大学院生のために時間を費やすことを厭わないことを強調している。指導教員も複数の院生を指導しなければならないだけでなく、研究費の獲得、研究体制の整備のほかに、診療義務、他の教育業務などを担当している場合が多く、非常に多忙である。指導教員は、少なくとも大学院生が納得する議論ができ、大学院生の質問には必ず答えることができる時間的余裕を持つ必要があるが、現状では困難な場合も多い。寄付講座などを利用して、大学院生の研究指導のための専任教員を確保することが有効と考えられる。

大学院生は、一般に知識はあり、既成の問題の解決方法には長けているが、明確に問題を系統

立てることや論理的に考えることを苦手とする傾向がある。したがって、個別指導の方法として、「ここにこういう問題がある。どのようにしてあなたはこの問題を解決するか？」と尋ねるなどの工夫が必要と考えられる。このような間接的な方法を通じて大学院生が自主的に理論を構築できるように支援している。また、研究活動自体にやりがいを感じると同時に、研究成果をあげるには多くの時間が必要であることを認識するような指導が重要と考えられる。早期から研究の面白さを感じさせるような指導体制や、能力があって成果があがれば、学位取得に要する時間が短くなる飛び級制度が行われている。

多くの研究科では、研究指導のためにミーティングを充実させている。例えば、以下のような内容について、通常は週１回以上行われている。

a. 各プロジェクトの進捗状況の報告
b. 実験結果についての議論
c. 連絡事項の伝達

これらにより、研究室の教員間・大学院生間で学問的刺激が誘発され、大学院生が自身の研究の進行状況を的確に判断し、今後の実験をより実践的に計画する機会となっている。

ウ　研究セミナーへの積極的参加

大学院生が学内で行われる各種研究セミナーに積極的に出席できるように、セミナー情報の周知を徹底している。また、大学院生は“年間セミナー出席表”に出席したセミナーを記載し、年度末に学事課に提出する自己申告制度の導入などを計画している。また、各種学会についても“年間学会出席表”を作成し、発表の有無を含めて出席した学会を学事課に提出することが提案されている。これらの方法により、大学院生自身のセミナーや学会に対する関心を高めるとともに学習記録として残してもらうことが主な目的である。

エ 「自主セミナー」の開催

各研究室に所属する大学院生が研究成果を発表し、データの解釈などについて活発に討論する自主セミナー（COE 若手研究者による発表会など）の開催を積極的に支援している。公式な場では話し合えないような簡単な疑問についての質疑や有用な内部情報の交換の場となっている。他の研究室の大学院生と話し交流することは、気分転換にもなり、刺激にもなる。また、新しい発想や共同研究のきっかけになることもあり、教員間･学生間およびそれら双方の学問的刺激を誘発する仕組みとして機能している。また、大学院生が勉学上のアドバイスを受けられるような機会としても機能している。

オ　指導教員による個別的な研究指導の充実度

個別的な研究指導においては、大学院生に研究早期から論文草稿を書くことを指導している。論文を書くことは考えることである。したがって、論文を書き始めると、新しいアイデアが得られ、見落としていた重要な問題点に気づくことが多い。たとえば実験データの再現性、結論をサポートするのに十分なデータがそろっているか、コントロール（比較・対照）実験をしているか、実験データのばらつき（実験誤差）はどれくらいか、などである。これらの疑問を１

つ１つつぶしていくために、さらなる計算や実験を繰り返す必要のあることが多い。指導教員は大学院生の書いた草稿の添削を繰り返し、大学院生は、論理の構築方法を学び、考える方法や研究する方法を自分のものにするように指導を受けている。早くから多くの論文書きを経験することによって、論文を書く技術の向上が期待される。

一部の研究室においては、個別的な研究指導の充実度について、年に１～２回の大学院生による評価を行っている。将来的には、評価表を学事課に提出し、指導教員へのフィードバックに役立てることも検討している。評価項目には、研究の進行状況、基礎的学力の達成度、科学的思考法の到達度などについての自己評価と、指導教員が十分な指導時間を確保しているか、指導教員と有意義な議論ができているか、などが含まれる。

複数指導性をとっている場合には、指導責任の順位を明示し、各指導教員について評価が行われるようにしている。学事課がこれを把握するようなシステムも考慮中である。指導責任の順位を形式的につけることを避け、直接的に指導を行う教員を第一位としてクレジットを与えることにより、指導責任を明確にしている研究室が多い。この順位は、例えば当該研究が学会や論文に発表された場合の著者の順位に反映される場合がある。

カ　研究分野や指導教員に関する大学院生からの変更希望について

原則として大学院生の希望にしたがって対応している。しかし、混乱を避けるため変更の時期は随時ではなく、年２回、変更前後の指導教員の合意の上で決定され、変更した大学院生は学位取得に通常よりも時間がかかる可能性が高いことを了承することなどを条件としている。

キ　独立した研究者を育成するための方策

米国の大学院で実施されている Qualification Test、もしくはこれに準じる制度の導入が、一部の研究室で検討されている。日本の大学院修了者が世界を舞台として活躍する独立した研究者となるために、講義の充実と並んで効果的であると考えられる。本テストについては、以下の２つの項目を大学院生に課し、３～５人の研究科委員または研究プロジェクト・リーダーからなるコミッティーが評価するシステムである。

a. １編のリサーチ・レポートの評価：大学院生が指導教員のもとで行なって得られた初期の成果を出発点として、その研究がなぜ重要なのか、またこれからどのような方向でこの研究を進めていくのかを説明するものである。学位論文とは異なり、最終的な研究成果でなく、これから進めていく研究について十分に理解し、なおかつ考える能力を持っているかどうかをディスカッションを通じて評価する。

b. ２編のオリジナル・リサーチの評価：自分で考えたテーマを提案し、計画書にまとめる。２つの計画書のうち１つは自分が関係している研究分野のものであり、もう１つは他の研究分野における提案とする。当該分野の学術論文を多く読むことで、オリジナリティのある的確な研究テーマを作り出し、それを提案することで能力を評価する。

ク　学生の研究活動への支援措置（研究プロジェクトへの参加促進、各種論文集への執筆促進）

医学部学生については、早くから研究に興味を持つ学生を、自主学習の中で積極的に研究活動に参加させている。学生が自主学習を選ぶための資料に、具体的な研究内容、業績などを盛り込んで充実を図るとともに、学生も自主セミナーに積極的に出席するよう支援し、希望する研究プ

ロジェクトへの参加を促進している。学生が参加したプロジェクトが論文として発表される場合には、学生を共著者に加えることも重要である。さらに熱意のある学生には、独立した簡単な研究プロジェクトを与える場合もある。

現状では、指導教員の時間的制約のため、学生の教育・指導が不十分となることが少なくない。大学院生が自ら関わっているプロジェクトについて、学生の指導係（Teaching Assistant）を務める場合があり、その場合、学会発表・論文では学生も共著者とするようにしている。

また、研究活動に必要な研修については、大学院生と研究指導者の話し合いを通じて最善の機会が確保されるように配慮している。通常の研修会への参加はもとより、短期留学、関連臨床施設における短期特別臨床研修など、基礎系、臨床系、それぞれの教室が研修機会を確保するための特別カリキュラム、特例を設置し、個々の大学院生の必要性に応じた柔軟な対応を目指している。

ケ　医学系大学院における臨床系専攻の学生に対し、病院内でなされる教育・研究指導とこれを支える人的、物的体制の充実度

臨床系専攻の学生においては、病院における臨床経験を研究に生かすことが特に重要である。実際の診療場面において、専門医師が当該学生の研究領域、将来構想を踏まえて実地教育を行っている。また、病院内で経験される症例については、臨床研究に結び付けることを前提にカンファレンスなどで検討し、学会、雑誌等で積極的に報告するように指導している。研究室での実験が研究の中心である場合でも、病院診療に積極的に参加するようにカリキュラムを設定している。いずれの場合でも、大学院生をいわゆる労働力として扱わないように特に配慮している。

コ　医学臨床系専攻の学生について、臨床研修と研究の両立への配慮

臨床系は少なくとも一般臨床研修２年、できればそれに加えて専門医研修２年以上を修了した後、大学院に入学するように指導し、臨床研修と研究を同時に行うことを避け、どちらかに集中するようにしている研究室が多い。また、臨床研修と研究を同時に行わなければならない場合には、臨床研修を時間で区切ることのできる外来、検査などの研修にとどめ、それが困難な病棟主治医となるような研修を避けることで、研究および学習の時間を確保するようにしている。

(4)　教育改善または教育研究指導方法の改善への組織的な取組み

・　大学院生による授業評価の導入について

アンケート形式によって得られた評価の扱いは慎重に行うべきである。なぜなら、大学院生の要求は学部学生に比較して多様なことが予想されるためである。たとえば、ある大学院生の意見を聞き入れて講義内容を変更すると、別の意見が返ってきて元に戻さざるを得ないことがしばしばみられる。そのため、講義の内容よりも講義方法に関して共通する意見を抽出し、簡単なガイドラインを設けることを検討している（下表）。実際には、教員の研究分野が大学院生自身の研究分野に近い場合には良い授業と評価されることが多い。教科書や論文に書いてあることを説明するにとどまらず、最先端の研究成果に加えて、研究達成の裏話や競争などのいきさつをまじえた講義を行うと、大学院生は興味を持ち、研究に対するモチベーションを高めることになり、結果として評価も高いようである。大学院生たちが将来、どのような研究生活・人生を送るか、どのように競争に打ち勝って成果をあげていくかを考えるための場となることを目指している。

表　講義アンケートより

好ましい講義
- 簡潔・わかりやすい
- はじめの Take home message（目新しさ）
- 要点を絞り、列挙する
- 最低限重要部分とそれ以外の部分（新しいホットな話題）を区別
- Power Point の使用
- 文字が大きく（少なく）、見やすいスライド
- 配布物あり
- ハンドアウト（余白・書き込みノートあり）
- 症例呈示の形式
- 学生に質問をする（参加型）
- 少し早めに終わる（集中力の問題もある）

改善してほしい講義
- OHP の使用（文字が小さくて見にくい）
- 文字の多いプリント
- 重要部分を強調してほしい・単調にならないでほしい
- 最低限重要部分とそれ以外の部分（新しいホットな話題）を区別して
- 症例・写真・図を多くしてほしい

・　シラバスの適切性

現在、大学院生を対象とした講義についてシラバス作成は義務化されていない。医学部授業については、2003 年度から従来のシラバスを大幅に改善し、単に授業予定にとどまらず、授業コマごとの教育目標や行動目標を織り込むことで学生が授業を受けるにあたって必要な情報を充分に盛り込むこととした。今後は、改善後のシラバスに対する学生の声を取り入れ、シラバスと授業を有機的に連携させるなど、更に教育の質向上に貢献させることが必要と考えられる。同様の改善策を大学院授業についても実施することが検討されている。

・　学生による授業評価の導入状況

従来、一部の授業科目においてアンケートによる授業評価が導入されていた。医学部教育委員会及び医学教育統轄センターにおいて、全ての科目において授業評価の導入をするとの方針決定がなされた結果、2004 年度においては評価用紙を各教育部門にあった形で作成し、授業中および授業終了後の試験時などに実施された。この結果を得て、さらなる教育の改良に取り組む予定である。今後、大学院を含む医学部全体としての授業評価システムの構築・導入及びシステムそのものの評価体制を充実させる予定である。

(5)　授業の適正人数規模

医学研究科における授業のうち、講義形式（大学院特別講義、年間約 40 コマ）は、定員 68 名で行われており、質疑応答を含めたインターラクティブな授業形態が可能である。技術講習コースなど少人数で行う必要がある授業については、数回に分けて行うことにより双方向授業を実現

している。
2004年7月に、第2校舎を改築し、サイバーネットによるPBL（Problem-based Learning）チュートリアルの教育スペースを確保した。9人用の小部屋が16部屋確保され、授業人数の適性化に貢献するものと期待される。このスペースを、少人数授業に使用することにより、講義内容に合わせて柔軟にクラス編成を設定することが可能になると期待される。

(6) 情報機器を活用した教育の実施状況

2003度においては、医学研究科修士課程に対する「生命現象のコンピュータシミュレーション」等において、医学インフォメーションテクノロジーセンター管理の貸し出しPC等を活用した授業が行われた。さらに、2004年度からは、サイバーネットを利用したPBLチュートリアルを開始すべく準備中である。

(7) e-Learning、遠隔授業の実施状況と今後の取組み

大学院博士課程については、2003度より、生命科学ＣＯＥプログラムにおいて、生命科学のＲＡを主な対象として、理工学研究科（矢上キャンパス）、政策メディア研究科（湘南藤沢キャンパス）、先端生命科学研究所（鶴岡キャンパス）と医学研究科（信濃町キャンパス）の4拠点を遠隔講義システムで結んで、システムバイオロジー関連の講義を定期的に開催し、活発な質疑応答が行われている。医学研究科の大学院生は毎回20名程度の参加があり、医学の専門分野領域に限らず、情報科学との境界領域を含む幅広い教育がなされている。2004度以降も、引き続き同システムを活用して、システムバイオロジーの研究者の養成を進めていく予定である。システムバイオロジーは、分子レベルの情報を統合して生命現象をシステムとして理解・制御することを目指す新しい学問分野である。遠隔講義システムを活用して、情報科学、コンピューター科学等の専門家による講義と質疑を通して、従来の研究科単位の縦割り型の教育では期待できなかった効果をあげつつある。

(8) セメスター制の導入状況あるいは導入計画

大学院について、セメスター制は導入されていない。

Ⅲ－３ 国内外における教育研究交流

(1) 国際交流推進に関する基本方針および国際交流の現状と課題

・ 大学院生の国外留学

国外留学を希望する院生は多い。留学の時期については、指導責任者と院生の直接交渉により柔軟に決定されることが多い。大学院在学中の留学もまれではない。留学期間も様々である。これは、留学の目的が、教育研究交流の促進よりも、大学院生本人の研究者としてのキャリアを充実させることにあるからである。研究指導責任の所在が不明確にならないように慎重に検討した上で決定されている。

・ 国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性

国際交流委員会等を通じて、外国大学との提携を強化、学生の交換留学制度などを充実させている。慶應医学賞の設置により、特に若手の研究者、大学院生が世界的視野で大きな夢を持って研究に勤しめるような環境づくりに配慮している。

(2) 外国人教員の受入れ体制の整備状況

日本国内に長期滞在している外国人講師による講義が、学生、研修医、大学院生を対象に、定期的に行われている。具体例としては、ジョン高山氏（UCSF 準教授、成育医療センター総合診療部部長、慶應義塾大学医学部客員教授）による月１回の英語による講義などがあげられる。

Ⅲ－４ 通信教育

Ⅲ－５ 専門職大学院のカリキュラム

(1) 専門職大学院におけるカリキュラム編成上の義塾の独自性・特色

(2) 専門職大学院における高度専門職業人養成機関に相応しい教育内容･水準を維持するための方途

(3) 専門職大学院における高度専門職業人養成機関に相応しい修了認定の仕組み

Ⅲ－６ 「連携大学院」の教育課程

(1) 学外の研究所等との連携において大学院課程の教育内容の体系性･一貫性を確保するための方途

現在、「国立がんセンター」、「国立成育医療センター」、「東京大学医科学研究所」、「国立感覚器センター」、「（財）実験動物中央研究所」との連携大学院を構築中であるが、現在のところはまだ実施していない。

Ⅲ－７ 学位授与･課程修了の認定

学位審査の透明性・客観性を高める仕組みとして、審査委員（副査）に学内の助教授・講師クラスの教員や学外の専門家も採用し、より客観的な審査を推進するため「学位審査の特別審査委員について」の申し合わせを 2002 年 6 月 10 日に制定した。また、修士課程は、審査委員会での二回にわたる論文審査（一般公開一回、非公開一回）を行い、厳格かつ客観的に、学位認定の水準を高める努力を行っている。

a. 博士課程（標準修業年限 4 年間）では、特に優れた大学院生に対して 2002・2003 年度間に 3 件の 3 年修了を認めている。

b. 博士課程の 3 年修了を促進するため、「大学院医学研究科学生の履修内容審査に関する申し合わせ」を 2002 年 2 月 18 日研究科委員会おいて改正し、課程博士授与の促進を図っている。

学位取得数　（人）

		2000年	2001年	2002年	2003年
修士		9	11	10	14
博士	甲	22	22	23	38
	乙	51	80	67	61
	合計	73	102	90	99

Ⅳ　研究活動と研究体制の整備

Ⅳ－１　研究活動

(1)　論文等研究成果の発表状況

ア　学術雑誌（学会誌・商業誌)、一般雑誌、政府機関報告書等に掲載された論文数

2000年度　論文発表　2317
2001年度　論文発表　2432
2002年度　論文発表　2597

イ　学会発表

2000年度　3927
2001年度　3878
2002年度　3939

ウ　著書

2000年度　629
2001年度　531
2002年度　750

これらの情報については、慶應義塾ホームページから公開されている。
様々な研究成果の発表を行なっている。

代表的な論文は以下の通り
2000年以降に発表された論文で慶應義塾大学医学部に所属する著者に含むものが約2400件あった（データベース：ISI Web of Science, 2004年3月現在)。そのうち被引用回数がこれまでに20回を超えているものは以下の通り。

1. Lander ES el al. **Initial sequencing and analysis of the human genome**. ***Nature***. 2001; 409(6822) : 860-921.（被引用回数 **3101**）

2. Hattori M et al. **The DNA sequence of human chromosome 21**. ***Nature***. 2000 ; 405 (6784): 311-319.（被引用回数 : **433**）

3. Shimura H et al. **Familial Parkinson disease gene product, parkin, is a ubiquitin-protein ligase**. ***Nature Genetics***. 2000;25(3):302-305.（被引用回数 : **299**）

4. McPherson JD et al. **A physical map of the human genome**. ***Nature***. 2001 ; 409(6822) : 934-941.（被引用回数 : **163**）

5. Montell C et al. **A unified nomenclature for the superfamily of TRP cation channels**. ***Molecular Cell***. 2002;9(2):229-231.（被引用回数 : **101**）

6. Miyata T et al. **Asymmetric inheritance of radial glial fibers by cortical neurons**. ***Neuron***. 2001;31(5):727-741.（被引用回数 : **101**）

7. Fukao T et al. **Synergistic effects of IL-4 and IL-18 on IL-12-dependent IFN-gamma production by dendritic cells**. ***Journal of Immunology***. 2000;164(1):64-71.（被引用回数 : **78**）

8. Suzuki A, et al. **T cell-specific loss of Pten leads to defects in central and peripheral tolerance**. ***Immunity***. 2001;14(5):523-534.（被引用回数 : **69**）

9. Yoshihara Y et al. **Matrix metalloproteinases and tissue inhibitors of metalloproteinases in synovial fluids from patients with rheumatoid arthritis or osteoarthritis**. ***Annals of the Rheumatic Diseases***. 2000;59(6):455-461.（被引用回数 : **67**）

10. Kaneko Y et al. **Musashi1: An evolutionally conserved marker for CNS progenitor cells including neural stem cells**. ***Developmental Neuroscience***. 2000;22(1-2):139-153.（被引用回数 : **67**）

11. Maeda F et al. **Modulation of corticospinal excitability by repetitive transcranial magnetic stimulation**. ***Clinical Neurophysiology***. 2000;111(5):800-805.（被引用回数 : **61**）

12. Amagai M et al. **Toxin in bullous impetigo and staphylococcal scalded-skin syndrome targets desmoglein 1**. ***Nature Medicine***. 2000;6(11):1275-1277.（被引用回数 : **57**）

13. Matsuda S et al. **Mechanisms of action of cyclosporine**. ***Immunopharmacology***. 2000;47(2-3):119-125.（被引用回数 : **56**）

14. Takanashi K et al. **CYP2C9 Ile（359）and Leu（359）variants: enzyme kinetic study with seven substrates.** ***Pharmacogenetics***. 2000;10(2):95-104.（被引用回数：**53**）

15. Matsuda S et al. **c-Jun N-terminal kinase（JNK）-interacting protein-1b/islet-brain-1 scaffolds Alzheimer's amyloid precursor protein with JNK.** ***Journal of Neuroscience***. 2001;21(17):6597-6607.（被引用回数：**50**）

16. Conlin PR et al. **Angiotensin II antagonists for hypertension: Are there differences in efficacy?** ***American Journal of Hypertension***. 2000;13(4):418-426.（被引用回数：**49**）

17. Kyokane T et al. **Carbon monoxide from heme catabolism protects against hepatobiliary dysfunction in endotoxin-treated rat liver.** ***Gastroenterology***. 2001;120(5):1227-1240.（被引用回数：**49**）

18. Kuno K et al. **ADAMTS-1 cleaves a cartilage proteoglycan, aggrecan.** ***Febs Letters***. 2000;478(3):241-245.（被引用回数：**47**）

19. Yamauchi T et al. **Cloning of adiponectin receptors that mediate antidiabetic metabolic effects.** ***Nature***. 2003;423(6941):762-769.（被引用回数：**47**）

20. Frucht DM et al. **IFN-gamma-production by antigen-presenting cells: mechanisms emerge.** ***Trends in Immunology***. 2001;22(10):556-560.（被引用回数：**47**）

21. Sano M et al. **ERK and p38 MAPK, but not NF-kappa B, are critically involved in reactive oxygen species-mediated induction of IL-6 by angiotensin II in cardiac fibroblasts.** ***Circulation Research***. 2001;89(8):661-669.（被引用回数：**46**）

22. Matsuda M et al. **DMY is a Y-specific DM-domain gene required for male development in the medaka fish.** ***Nature***. 2002;417(6888):559-563.（被引用回数：**46**）

23. Suematsu M, Ishimura Y. **The heme oxygenase-carbon monoxide system: A regulator of hepatobiliary function.** ***Hepatology***. 2000;31(1):3-6.（被引用回数：**45**）

24. Sawamoto K et al. **Generation of dopaminergic neurons in the adult brain from mesencephalic precursor cells labeled with a nestin-GFP transgene.** ***Journal of Neuroscience***. 2001;21(11):3895-3903.（被引用回数：**45**）

25. Leertouwer TC et al. **Stent placement for renal arterial stenosis: Where do we stand? A meta-analysis.** ***Radiology***. 2000;216(1):78-85.（被引用回数：**45**）

26. Tsuganezawa H et al. **A new member of the HCO3- transporter superfamily is an apical anion exchanger of beta-intercalated cells in the kidney.** ***Journal of Biological Chemistry***. 2001;276(11):8180-8189.（被引用回数：**43**）

27. Warburton PE et al. **Molecular cytogenetic analysis of eight inversion duplications of human chromosome 13q that each contain a neocentromere**. ***American Journal of Human Genetics***. 2000;66(6):1794-1806.（被引用回数：**42**）

28. Mori K et al. **Expression levels of thymidine phosphorylase and dihydropyrimidine dehydrogenase in various human tumor tissues**. ***International Journal of Oncology***. 2000;17(1):33-38.（被引用回数：**42**）

29. Ando N et al. **Improvement in the results of surgical treatment of advanced squamous esophageal carcinoma during 15 consecutive years**. ***Annals of Surgery***. 2000;232(2):225-232.（被引用回数：**41**）

30. Pitkanen J et al. **The autoimmune regulator protein has transcriptional transactivating properties and interacts with the common coactivator CREB-binding protein**. ***Journal of Biological Chemistry***. 2000;275(22):16802-16809.（被引用回数：**41**）

31. Amagai M et al. **Use of autoantigen-knockout mice in developing an active disease model for pemphigus**. ***Journal of Clinical Investigation***. 2000;105(5):625-631.（被引用回数：**41**）

32. Fukao T et al. **Inducible expression of Stat4 in dendritic cells and macrophages and its critical role in innate and adaptive immune responses**. ***Journal of Immunology***. 2001;166(7):4446-4455.（被引用回数：**41**）

33. Maeda F et al. **Interindividual variability of the modulatory effects of repetitive transcranial magnetic stimulation on cortical excitability**. ***Experimental Brain Research***. 2000;133(4):425-430.（被引用回数：**39**）

34. Inoue N et al. **Lack of common NOD2 variants in Japanese patients with Crohn's disease**. ***Gastroenterology***. 2002;123(1):86-91.（被引用回数：**39**）

35. Saito Y et al. **Expression of mRNA for DNA methyltransferases and methyl-CpG-binding proteins and DNA methylation status on CpG islands and pericentromeric satellite regions during human hepatocarcinogenesis**. ***Hepatology***. 2001;33(3):561-568.（被引用回数：**39**）

36. Shim WS et al. **Estradiol hypersensitivity and mitogen-activated protein kinase expression in long-term estrogen deprived human breast cancer cells in vivo**. ***Endocrinology***. 2000;141(1):396-405.（被引用回数：**38**）

37. Suzuki K et al. **Gut cryptopatches: Direct evidence of extrathymic anatomical sites for intestinal T lymphopoiesis**. ***Immunity***. 2000;13(5):691-702.（被引用回数：**38**）

38. Moriya K et al. **Oxidative stress in the absence of inflammation in a mouse model for hepatitis C virus-associated hepatocarcinogenesis**. ***Cancer Research***. 2001;61(11):4365-4370.（被引用回数：**37**）

39. Kanai T et al. **Macrophage-derived IL-18-mediated intestinal inflammation in the murine model of Crohn's disease**. ***Gastroenterology***. 2001;121(4):875-888.（被引用回数：**37**）

40. Kim CB et al. **Hox cluster genomics in the horn shark, Heterodontus francisci**. ***Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America***. 2000;97(4):1655-1660.（被引用回数：**37**）

41. Tanigawara Y. **Role of P-glycoprotein in drug disposition**. ***Therapeutic Drug Monitoring***. 2000;22(1):137-140.（被引用回数：**37**）

42. Gombart AF et al. **Mutations in the gene encoding the transcription factor CCAAT/enhancer binding protein alpha in myelodysplastic syndromes and acute myeloid leukemias**. ***Blood***. 2002;99(4):1332-1340.（被引用回数：**36**）

43. Laky K et al. **Enterocyte expression of interleukin 7 induces development of gamma delta T cells and Peyer's patches**. ***Journal of Experimental Medicine***. 2000;191(9):1569-1580.（被引用回数：**36**）

44. Hara Y et al. **LTRPC2 Ca2+-permeable channel activated by changes in redox status confers susceptibility to cell death**. ***Molecular Cell***. 2002;9(1):163-173.（被引用回数：**36**）

45. Sonoda A et al. **Association between platelet glycoprotein Ib alpha genotype and ischemic cerebrovascular disease**. ***Stroke***. 2000;31(2):493-497.（被引用回数：**36**）

46. Hisahara S et al. **Targeted expression of baculovirus p35 caspase inhibitor in oligodendrocytes protects mice against autoimmune-mediated demyelination**. ***Embo Journal***. 2000;19(3):341-348.（被引用回数：**35**）

47. Sano M et al. **Interleukin-6 family of cytokines mediate angiotensin II-induced cardiac hypertrophy in rodent cardiomyocytes**. ***Journal of Biological Chemistry***. 2000;275(38):29717-29723.（被引用回数：**35**）

48. Hirose H et al. **Effects of pioglitazone on metabolic parameters, body fat distribution, and serum adiponectin levels in Japanese male patients with type 2 diabetes**. ***Metabolism-Clinical and Experimental***. 2002;51(3):314-317.（被引用回数：**35**）

49. Scott HS et al. **Insertion of beta-satellite repeats identifies a transmembrane protease causing both congenital and childhood onset autosomal recessive deafness.** ***Nature Genetics***. 2001;27(1):59-63.（被引用回数：**35**）

50. Kanai T et al. **Interleukin 18 is a potent proliferative factor for intestinal mucosal lymphocytes in Crohn's disease.** ***Gastroenterology***. 2000;119(6):1514-1523.（被引用回数：**34**）

51. Hashimoto Y et al. **Neuronal apoptosis by apolipoprotein E4 through low-density lipoprotein receptor-related protein and heterotrimeric GTPases.** ***Journal of Neuroscience***. 2000;20(22):8401-8409.（被引用回数：**34**）

52. Hashimoto Y et al. **A rescue factor abolishing neuronal cell death by a wide spectrum of familial Alzheimer's disease genes and A beta.** ***Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America***. 2001;98(11):6336-6341.（被引用回数：**34**）

53. Matsubara Y et al. **Association between diabetic retinopathy and genetic variations in alpha 2 beta 1 integrin, a platelet receptor for collagen.** ***Blood***. 2000;95(5):1560-1564.（被引用回数：**33**）

54. Nabeshima K et al. **Front-cell-specific expression of membrane-type 1 matrix metalloproteinase and gelatinase a during cohort migration of colon carcinoma cells induced by hepatocyte growth factor/scatter factor.** ***Cancer Research***. 2000;60(13):3364-3369.（被引用回数：**33**）

55. Nakashima J et al. **Serum interleukin 6 as a prognostic factor in patients with prostate cancer.** ***Clinical Cancer Research***. 2000;6(7):2702-2706.（被引用回数：**33**）

56. Levanon D et al. **Architecture and anatomy of the genomic locus encoding the human leukemia-associated transcription factor RUNX1/AML1.** ***Gene***. 2001;262(1-2):23-33.（被引用回数：**33**）

57. Aapola U et al. **Isolation and initial characterization of a novel zinc finger gene, DNMT3L, on 21q22.3, related to the cytosine-5-methyltransferase 3 gene family.** ***Genomics***. 2000;65(3):293-298.（被引用回数：**32**）

58. Hirao A et al. **Chk2 is a tumor suppressor that regulates apoptosis in both an ataxia telangiectasia mutated (ATM) -dependent and an ATM-independent manner.** ***Molecular and Cellular Biology***. 2002;22(18):6521-6532.（被引用回数：**32**）

59. Okabe M et al. **Translational repression determines a neuronal potential in Drosophila asymmetric cell division.** ***Nature***. 2001;411(6833):94-98.（被引用回数：**32**）

60. Yoshihashi H et al. **Imprinting of human GRB10 and its mutations in two patients with Russell-Silver syndrome**. ***American Journal of Human Genetics***. 2000;67(2):476-482.（被引用回数：**31**）

61. Ikeda M et al. **Expression of vascular endothelial growth factor isoforms and their receptors Flt-I, KDR, and neuropilin-I in synovial tissues of rheumatoid arthritis**. ***Journal of Pathology***. 2000;191(4):426-433.（被引用回数：**31**）

62. Tsubota K et al. **Defective cellular trafficking of lacrimal gland aquaporin-5 in Sjogren's syndrome**. ***Lancet***. 2001;357(9257):688-689.（被引用回数：**31**）

63. Kitamura K et al. **Mutation of ARX causes abnormal development of forebrain and testes in mice and X-linked lissencephaly with abnormal genitalia in humans**. ***Nature Genetics***. 2002;32(3):359-369.（被引用回数：**31**）

64. Yamamoto Y et al. **Correlation of the adipocyte-derived protein adiponectin with insulin resistance index and serum high-density lipoprotein-cholesterol, independent of body mass index, in the Japanese population**. ***Clinical Science***. 2002;103(2):137-142.（被引用回数：**30**）

65. Kuwana M et al. **Induction of antigen-specific human CD4（+）T cell anergy by peripheral blood DC2 precursors**. ***European Journal of Immunology***. 2001;31(9):2547-2557.（被引用回数：**30**）

66. Mifune M et al. **Angiotensin II type 2 receptors stimulate collagen synthesis in cultured vascular smooth muscle cells**. ***Hypertension***. 2000;36(5):845-850.（被引用回数：**30**）

67. Lemaitre V et al. **ApoE knockout mice expressing human matrix metalloproteinase-1 in macrophages have less advanced atherosclerosis**. ***Journal of Clinical Investigation***. 2001;107(10):1227-1234.（被引用回数：**30**）

68. Imai T et al. **The neural RNA-binding protein Musashi1 translationally regulates mammalian numb gene expression by interacting with its mRNA**. ***Molecular and Cellular Biology***. 2001;21(12):3888-3900.（被引用回数：**30**）

69. Keyoung HM et al. **High-yield selection and extraction of two promoter-defined phenotypes of neural stem cells from the fetal human brain**. ***Nature Biotechnology***. 2001;19(9):843-850.（被引用回数：**30**）

70. Ohgami M et al. **Scarless endoscopic thyroidectomy: Breast approach for better cosmesis**. ***Surgical Laparoscopy Endoscopy & Percutaneous Techniques***. 2000;10

(1) :1-4. (被引用回数 : **30**)

71. Matsuoka S et al. **Generation of definitive hematopoietic stem cells from murine early yolk sac and paraaortic splanchnopleures by aorta-gonad-mesonephros region-derived stromal cells**. ***Blood***. 2001;98(1):6-12. (被引用回数 : **29**)

72. Kohyama J et al. **Brain from bone: Efficient "meta-differentiation" of marrow stroma-derived mature osteoblasts to neurons with Noggin or a demethylating agent**. ***Differentiation***. 2001;68(4-5):235-244. (被引用回数 : **29**)

73. Otani A et al. **Angiotensin II-stimulated vascular endothelial growth factor expression in bovine retinal pericytes**. ***Investigative Ophthalmology & Visual Science***. 2000;41(5):1192-1199. (被引用回数 : **29**)

74. Okamoto R et al. **Damaged epithelia regenerated by bone marrow-derived cells in the human gastrointestinal tract**. ***Nature Medicine***. 2002;8(9):1011-1017. (被引用回数 : **29**)

75. Wu H et al. **Protection against pemphigus foliaceus by desmoglein 3 in neonates**. ***New England Journal of Medicine***. 2000;343(1):31-35. (被引用回数 : **29**)

76. Togane Y et al. **Protective roles of endogenous-carbon monoxide in neointimal development elicited by arterial injury**. ***American Journal of Physiology-Heart and Circulatory Physiology***. 2000;278(2):H623-H632. (被引用回数 : **28**)

77. Kawamura C et al. **Bone morphogenetic protein-2 induces apoptosis in human myeloma cells with modulation of STAT3**. ***Blood***. 2000;96(6):2005-2011. (被引用回数 : **28**)

78. Shih CH et al. **Vascular endothelial growth factor expression predicts outcome and lymph node metastasis in squamous cell carcinoma of the esophagus**. ***Clinical Cancer Research***. 2000;6(3):1161-1168. (被引用回数 : **28**)

79. Kennedy MA et al. **Characterization of the human ABCG1 gene - Liver X receptor activates an internal promoter that produces a novel transcript encoding an alternative form of the protein**. ***Journal of Biological Chemistry***. 2001;276(42) :39438-39447. (被引用回数 : **28**)

80. Rosenberg N et al. **The frequent 5,10-methylenetetrahydrofolate reductase C677T polymorphism is associated with a common haplotype in whites, Japanese, and Africans**. ***American Journal of Human Genetics***. 2002;70(3):758-762. (被引用回数 : **27**)

81. Tan FK et al. **Association of fibrillin 1 single-nucleotide polymorphism haplotypes**

with systemic sclerosis in Choctaw and Japanese populations. ***Arthritis and Rheumatism***. 2001;44(4):893-901.（被引用回数：**27**）

82. Matsuoka S et al. **CD34 expression on long-term repopulating hematopoietic stem cells changes during developmental stages**. ***Blood***. 2001;97(2):419-425.（被引用回数：**27**）

83. Andjelic S et al. **Phosphatidylinositol 3-kinase and NF-kappa B/Rel are at the divergence of CD40-mediated proliferation and survival pathways**. ***Journal of Immunology***. 2000;165(7):3860-3867.（被引用回数：**27**）

84. Ishikawa Y et al. **Dihydropyrimidine dehydrogenase and messenger RNA levels in gastric cancer: Possible predictor for sensitivity to 5-fluorouracil**. ***Japanese Journal of Cancer Research***. 2000;91(1):105-112.（被引用回数：**26**）

85. Hori T et al. **Wpkci, encoding an altered form of PKCI, is conserved widely on the avian W chromosome and expressed in early female embryos: Implication of its role in female sex determination**. ***Molecular Biology of the Cell***. 2000;11(10):3645-3660.（被引用回数：**26**）

86. Oya M et al. **Constitutive activation of nuclear factor-kappa B prevents TRAIL-induced apoptosis in renal cancer cells**. ***Oncogene***. 2001;20(29):3888-3896.（被引用回数：**26**）

87. Kitagawa Y et al. **The role of the sentinel lymph node in gastrointestinal cancer**. ***Surgical Clinics of North America***. 2000;80(6):1799-+.（被引用回数：**26**）

88. Kosaki K et al. **Isoform-specific imprinting of the human PEG1/MEST gene**. ***American Journal of Human Genetics***. 2000;66(1):309-312.（被引用回数：**25**）

89. Shimada A et al **Elevated serum IP-10 levels observed in type 1 diabetes**. ***Diabetes Care***. 2001;24(3):510-515.（被引用回数：**25**）

90. Hashimoto G et al. **Inhibition of ADAMTS4（aggrecanase-1）by tissue inhibitors of metalloproteinases（TIMP-1, 2, 3 and 4）**. ***Febs Letters***. 2001;494(3):192-195.（被引用回数：**25**）

91. Yamamoto N et al. **Role of Deltex-1 as a transcriptional regulator downstream of the notch receptor**. ***Journal of Biological Chemistry***. 2001;276(48):45031-45040.（被引用回数：**25**）

92. Yamada Y et al. **Association of transforming growth factor beta 1 genotype with therapeutic response to active vitamin D for postmenopausal osteoporosis**. ***Journal of Bone and Mineral Research***. 2000;15(3):415-420.（被引用回数：**25**）

93. Akiyama M et al. **Changing patterns of localization of putative stem cells in developing human hair follicles**. ***Journal of Investigative Dermatology***. 2000;114(2):321-327.（被引用回数：**25**）

94. Ito D et al. **C242T polymorphism of NADPH oxidase p22 PHOX gene and ischemic cerebrovascular disease in the Japanese population**. ***Stroke***. 2000;31(4):936-939.（被引用回数：**25**）

95. Sameshima T et al. **Glioma cell extracellular matrix metalloproteinase inducer（EMMPRIN）（CD147）stimulates production of membrane-type matrix metalloproteinases and activated gelatinase A in co-cultures with brain-derived fibroblasts**. ***Cancer Letters***. 2000;157(2):177-184.（被引用回数：**24**）

96. Nishiyama T et al. **Immunotherapy of bladder cancer using autologous dendritic cells pulsed with human lymphocyte antigen-A24-specific MAGE-3 peptide**. ***Clinical Cancer Research***. 2001;7(1):23-31.（被引用回数：**24**）

97. Footz TK et al. **Analysis of the cat eye syndrome critical region in humans and the region of conserved synteny in mice: A search for candidate genes at or near the human chromosome 22 pericentromere**. ***Genome Research***. 2001;11(6):1053-1070.（被引用回数：**24**）

98. Hashimoto Y et al. **Multiple mechanisms underlie neurotoxicity by different types of Alzheimer's disease mutations of amyloid precursor protein**. ***Journal of Biological Chemistry***. 2000;275(44):34541-34551.（被引用回数：**24**）

99. Egawa T et al. **Formation of compound I in the reaction of native myoglobins with hydrogen peroxide**. ***Journal of Biological Chemistry***. 2000;275(45):34858-34866.（被引用回数：**24**）

100. Shibata M et al. **Caspases determine the vulnerability of oligodendrocytes in the ischemic brain**. ***Journal of Clinical Investigation***. 2000;106(5):643-653.（被引用回数：**24**）

101. Akama TO et al. **Germ cell survival through carbohydrate-mediated interaction with Sertoli cells**. ***Science***. 2002;295(5552):124-127.（被引用回数：**24**）

102. Suzuki K et al. **Construction and evaluation of a porcine bacterial artificial chromosome library**. ***Animal Genetics***. 2000;31(1):8-12.（被引用回数：**23**）

103. Hashimoto Y et al. **Mechanisms of neuroprotection by a novel rescue factor humanin from Swedish mutant amyloid precursor protein**. ***Biochemical and Biophysical Research Communications***. 2001;283(2):460-468.（被引用回数：**23**）

104. Kitagawa Y et al. **Radio-guided sentinel node detection for gastric cancer**. ***British Journal of Surgery***. 2002;89(5):604-608.（被引用回数：**23**）

105. Imai T et al. **Vascular smooth muscle cell-directed overexpression of heme oxygenase-1 elevates blood pressure through attenuation of nitric oxide-induced vasodilation in mice**. ***Circulation Research***. 2001;89(1):55-62.（被引用回数：**23**）

106. Onoe Y et al. **Comparative effects of estrogen and raloxifene on B lymphopoiesis and bone loss induced by sex steroid deficiency in mice**. ***Journal of Bone and Mineral Research***. 2000;15(3):541-549.（被引用回数：**23**）

107. Hamada H et al. **Identification of multiple isolated lymphoid follicles on the antimesenteric wall of the mouse small intestine**. ***Journal of Immunology***. 2002;168(1):57-64.（被引用回数：**23**）

108. Kato S et al. **Amelioration of murine experimental colitis by inhibition of mucosal addressin cell adhesion molecule-1**. ***Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics***. 2000;295(1):183-189.（被引用回数：**23**）

109. Fukuda K. **Development of regenerative cardiomyocytes from mesenchymal stem cells for cardiovascular tissue engineering**. ***Artificial Organs***. 2001;25(3):187-193.（被引用回数：**22**）

110. Shimoyama Y et al. **Identification of three human type-II classic cadherins and frequent heterophilic interactions between different subclasses of type-II classic cadherins**. ***Biochemical Journal***. 2000;349:159-167.（被引用回数：**22**）

111. Oda A et al. **Rapid tyrosine phosphorylation and activation of Bruton's tyrosine/Tec kinases in platelets induced by collagen binding or CD32 cross-linking**. ***Blood***. 2000;95(5):1663-1670.（被引用回数：**22**）

112. Mori T, et al. **Risk-adapted pre-emptive therapy for cytomegalovirus disease in patients undergoing allogeneic bone marrow transplantation**. ***Bone Marrow Transplantation***. 2000;25(7):765-769.（被引用回数：**22**）

113. Matsui A et al. **Increased formation of oxidative DNA damage, 8-hydroxy-2'-deoxyguanosine, in human breast cancer tissue and its relationship to GSTP1 and COMT genotypes**. ***Cancer Letters***. 2000;151(1):87-95.（被引用回数：**22**）

114. Matsuzaki K et al. **Autocrine stimulatory mechanism by transforming growth factor beta in human hepatocellular carcinoma**. ***Cancer Research***. 2000;60(5):1394-1402.（被引用回数：**22**）

115. Fukao T, Koyasu S. **Expression of functional IL-2 receptors on mature splenic dendritic cells**. ***European Journal of Immunology***. 2000;30(5):1453-1457.（被引用回数 : **22**）

116. Dawson E et al. **A SNP resource for human chromosome 22: Extracting dense clusters of SNPs from the genomic sequence**. ***Genome Research***. 2001;11(1):170-178.（被引用回数 : **22**）

117. Heino M et al. **APECED mutations in the autoimmune regulator (AIRE) gene**. ***Human Mutation***. 2001;18(3):205-211.（被引用回数 : **22**）

118. Kubo S et al. **Parkin is associated with cellular vesicles**. ***Journal of Neurochemistry***. 2001;78(1):42-54.（被引用回数 : **22**）

119. Watanabe H et al. **Disruption of the epilepsy KCNQ2 gene results in neural hyperexcitability**. ***Journal of Neurochemistry***. 2000;75(1):28-33.（被引用回数 : **22**）

120. Atarashi H et al. **Three-year follow-up of patients with right bundle branch block and ST segment elevation in the right precordial leads - Japanese Registry of Brugada Syndrome**. ***Journal of the American College of Cardiology***. 2001;37(7):1916-1920.（被引用回数 : **22**）

121. Yamanaka H et al. **Expression and tissue localization of membrane-types 1, 2, and 3 matrix metalloproteinases in rheumatoid synovium**. ***Laboratory Investigation***. 2000;80(5):677-687.（被引用回数 : **22**）

122. Sudo H et al. **Antibody-regulated neurotoxic function of cell-surface ss-amyloid precursor protein**. ***Molecular and Cellular Neuroscience***. 2000;16(6):708-723.（被引用回数 : **22**）

123. Mochizuki H et al. **An AAV-derived Apaf-1 dominant negative inhibitor prevents MPTP toxicity as antiapoptotic gene therapy for Parkinson's disease**. ***Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America***. 2001;98(19):10918-10923.（被引用回数 : **22**）

124. Fukami M et al. **A member of a gene family on Xp22.3, VCX-A, is deleted in patients with X-linked nonspecific mental retardation**. ***American Journal of Human Genetics***. 2000;67(3):563-573.（被引用回数 : **21**）

125. Tsuchida E et al. **Exchange transfusion with albumin-heme as an artificial O-2-infusion into anesthetized rats: Physiological responses, O-2-delivery, and reduction of the oxidized hemin sites by red blood cells**. ***Bioconjugate Chemistry***. 2000;11(1):46-50.（被引用回数 : **21**）

126. Makino N et al. **Altered expression of heme oxygenase-1 in the livers of patients with portal hypertensive diseases**. ***Hepatology***. 2001;33(1):32-42.（被引用回数 : **21**）

127. Sameshima T et al. **Expression of EMMPRIN（CD147）, a cell surface inducer of matrix metalloproteinases, in normal human brain and gliomas**. ***International Journal of Cancer***. 2000;88(1):21-27.（被引用回数 : **21**）

128. Fukao T et al. **Selective loss of gastrointestinal mast cells and impaired immunity in PI3K-deficient mice**. ***Nature Immunology***. 2002;3(3):295-304.（被引用回数 : **21**）

129. Ohteki T et al. **Critical role of IL-15-IL-15R for antigen-presenting cell functions in the innate immune response**. ***Nature Immunology***. 2001;2(12):1138-1143.（被引用回数 : **21**）

130. Nanda I et al. **A duplicated copy of DMRT1 in the sex-determining region of the Y chromosome of the medaka, Oryzias latipes**. ***Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America***. 2002;99(18):11778-11783.（被引用回数 : **21**）

131. Maass N et al. **Down regulation of the tumor suppressor gene maspin in breast carcinoma is associated with a higher risk of distant metastasis**. ***Clinical Biochemistry***. 2001;34(4):303-307.（被引用回数 : 20）

132. Niikura T et al. **Insulin-like growth factor I（IGF-I）protects cells from apoptosis by Alzheimer's V642I mutant amyloid precursor protein through IGF-I receptor in an IGF-binding protein-sensitive manner**. ***Journal of Neuroscience***. 2001;21(6):1902-1910.（被引用回数 : **20**）

133. Nakada M et al. **Roles of membrane type 1 matrix metalloproteinase and tissue inhibitor of metalloproteinases 2 in invasion and dissemination of human malignant glioma**. ***Journal of Neurosurgery***. 2001;94(3):464-473.（被引用回数 : **20**）

134. Ishii K et al. **Development of pemphigus vulgaris in a patient with pemphigus foliaceus: Antidesmoglein antibody profile shift confirmed by enzyme-linked immunosorbent assay**. ***Journal of the American Academy of Dermatology***. 2000;42(5):859-861.（被引用回数 : **20**）

135. Segawa H et al. **Functional repression of islet-2 by disruption of complex with Ldb impairs peripheral axonal outgrowth in embryonic zebrafish**. ***Neuron***. 2001;30(2):423-436.（被引用回数 : **20**）

(2) 特筆すべき研究活動状況

国内外の学会での活動については上記 (1) に、また、獲得している研究費については IV-2-(4)

に概要を示す通りであり、活発な研究活動が展開されている。国内の大型の公的研究プロジェクトについては、主に以下のプロジェクトが学部内で動いている。

a. 文部科学省学術フロンティア事業
「生命医科学に関する融合研究」 1999 年度採択～ 2003 年度
b. 文部科学省ハイテクリサーチセンター
「慶應義塾大学医学部再生医学・治療研究開発センタープロジェクト」
2001 年度採択～ 2005 年度
c. 文部科学省採択 21 世紀 COE プログラム
2002 年度採択生命科学分野
「システム生物学による生命機能の理解と制御 」
拠点リーダー　柳川　弘志　理工学研究科教授
理工学研究科　医学研究科　政策メディア研究科、先端生命科学研究所
2003 年度採択　医学系
「低侵襲・新治療開発による個別化癌医療確立」
拠点リーダー　北島政樹　医学研究科教授
「幹細胞医学と免疫学の基礎・臨床一体型拠点―ヒト細胞と in vivo 実験医学を基盤とした新しい展開―」
拠点リーダー　岡野栄之　医学研究科教授
d. 文部科学省産学連携事業
「難知性神経疾患の克服に向けた診断・治療技術開発プロジェクト」
研究代表者　戸田正博　医学部外科学（外科） 2002 年度採択
e. 文部科学省リーディングプロジェクト
「網羅的代謝計測技術に基づく細胞機能シミュレーションとその応用並びに支援・基盤領域の研究開発」
研究代表者：末松　誠　医学研究科教授
参加大学　：東京大学、名古屋大学、大阪大学
「脊髄損傷に対する幹細胞治療の開発」
研究代表者　岡野栄之　医学研究科教授
f. 文部科学省 21 世紀型革新的先端ライフサイエンス技術開発プロジェクト
「樹状細胞の腫瘍内投与による消化器癌の免疫療法の開発」
研究代表者　河上裕　先端医科学研究所

これら以外にも厚生労働省補助金、文部科学省補助金等種々プロジェクトがある。
また、ＮＩＨからのグラントを得て海外の教員との共同研究を行なっているプロジェクト（下記）等、国際共同研究は多数ある。

・皮膚科　天谷専任講師
NIH Grant No.1-R01-AR48223-02 主任研究者　Dr. John R. Stanley
・ツムラ寄付講座　北島教授　渡辺助教授
NIH Prime Grant No.R21 AT001979 C. F. D. C. No. 93. 213 主任研究者　David M. Eisenberg, M.D.

(3) 附属研究所との関係・将来展望

総合医科学研究センターでは研究発表や意見交換を通じて研究者間の交流を図るため毎月、セミナーを開催している。大学院生はもとより大学教職員の積極的な参加を促し、大学・大学院と研究所の知的交流に努めている。

Ⅳ－２　研究体制の整備（経常的な研究条件の整備）

(1) （個人･共同）研究費･研究旅費の充実度･問題点

医学部は財政的に厳しい状況にあるため大学からの研究費は、有効ではあるものの少ない。研究する者は自分で外部資金等を獲得してくるという考え方が徹底している。学内の公共施設の利用についても、受益者負担が原則となっており、研究室の光熱水費の一部や中央機器管理部の様々な実験装置利用料、実験動物飼育料などについても研究者が実費負担している。しかし、現在ＣＯＥプログラムや文部科学省のリーディングプロジェクトをはじめ公的なプロジェクトを受けており、医学部全体とはいかないが、新たな大型研究費が流入している状況である。それに伴い、フォローサイトメトリーコアファシリティーやセルプロセシングセンター、ＧＭＰレベルベクター作製研究室の新設などが進行しつつある。それでも研究費を最大限に活用するための医学部全体としての研究体制が整っているとは言い難い。例えば研究設備・備品やコンピュータの維持・管理などに関わる学内のサポートは無きに等しく、医学部内で飼育されている遺伝子改変マウスのデータベース化はされておらず、新たな遺伝子改変マウス作製のサポート態勢も貧弱である。また、研究費を年度末に無理やり消化して無駄使いをしているという場面も見受けられる。この原因の一つは、大学から配分される研究費を単年度で消化する必要があることや、研究費配分時点に備品、消耗品費目別となっており、費目間の流動が困難なことが考えられる。他私立大学医学部では、大学配分研究費は年度繰り越しが可能であり、使途の制限もされていないところが多いことから、技術的には本学においても適用が可能と考えられ、研究費の有効利用のために是非とも改善することが望ましい。

(2) 教員研究個室等の整備状況と将来計画

基礎医学系教室では、実験室スペースに加えて、教員のための個室ないし２―３人が共同で使用する準個室が確保されている。臨床医学系教室では教授には個室環境、一部の助教授に対しては少人数で共用する準個室が確保されているが、その他の教員に対しては、実験室スペースとして確保されている大部屋で５―６名が全ての業務を行っている場合が多く改善が必要と思われる。

総合医科学研究センターの設置により、実験室スペース内にパーティションで仕切られた個人用空間を設けたりするなど、作業環境の整備が進められている。また、現在寄付講座が３件設置されており、研究費の使途に制限がない資金については研究環境のインフラ整備に利用が可能となっている。

(3) 教員の研究時間を確保させるための方途

大学医学部、特に臨床系教室においては、教育、研究、診療の各部門がそれぞれ高いレベルを

有し、なおかつ有機的に結びついている必要がある。なかでも、診療部門は極めて重要であり、日々の勤務において診療業務に割かれる時間が最大であるのが現状である。

そのような環境の中で、医学研究の進歩に貢献せずに、大学医学部の存在価値はなく、教員は、教育者、医療担当者であると同時に科学者であることが強調されている。作業仮説を設定し、研究費を獲得し、データを出し、学会、論文で発表し、世間の評価に耐えることは並大抵の仕事ではない。そのような業務（研究）を実地医療の現場において推進することができるのは大学医学部を除いて他にない、と考えられる。以上のような基本姿勢を医学部において徹底させることにより、特に臨床医学研究にたずさわる教員の研究時間を確保する努力を行っている。

・研究活動に必要な研修機会確保のための方策の適切性

教員の研究活動にとって研修機会は必須であるが、その確保は各教員の努力、教室の裁量に任されているのが現状であり医学部全体としての具体的な方策はない。教育、研究、さらに臨床系大学院の場合には診療業務により、研修機会を確保するための時間的余裕がないのが実情である。

(4)　特筆すべき競争的な研究環境の創出

ア　学内のデュアルサポート･システム（経常的研究資金と競争的研究資金）の運用について

a. 経常的研究資金を共同利用研究施設としての中央機器管理室等の運営等、公益的な性質の強い部門に配分するように検討を行っている。
b. 研究の円滑な推進のために人件費の確保が重要であるが、現在、研究費の中で、フルタイムの人件費を支払いうる研究費は少ない。人件費の支払いについて、2つ以上の研究資金から（＝デュアルサポート・システム）支払いうるシステムを充実させる方向で検討を進めている。
c. 指定寄付には、使用期限がないため「予算を使い切る」という従来の発想からの転換が図られ、コストの削減に役立っている。ただし、特に基礎医学教室においては指定寄付はあまり期待できないことから、上記のように、大学の経常費からの各教室への配分研究費について、年度末にゼロにするという使用期限をなくし、かつ費目指定をゆるめるなどの工夫が期待される。
d. 例外的であるが海外からの研究費（HFSPO Research Grants-France）も導入されている。今後も積極的に推進するとともに、受入れ態勢の整備を推進する方針である。

イ　流動的研究部門・流動的研究施設の設置・運用の状況について

a. リサーチパークプロジェクトについて
リサーチパークにおいて、数々の新しいプロジェクトが創出されていることは好ましいことである。一方、学部・学科を超えるプロジェクトが少なく、従来の「教室の枠」にとどまった研究室が多いことが問題である。開始後、4年が経過し、5年次の成果が問われる時期に達した。

b. 寄付講座について
現在、寄付講座が3件設置されている。寄付講座の資金によりインフラを整備し、新たな研

究を展開するとともに、公募型の助成金や寄付金獲得に成功している点は評価される。例えばファルマシア成長発達講座では第 1 期 3.5 年の受入れが 3.5 億円であり、第 1 期終了時の公募型助成金の総獲得額は 1.8 億円であり 50% を超えている。ただし、産学連携のかけ声のなかで、大学が企業の研究開発の下請けとして機能するようなことが無いように、慎重な運用が必要である。

ウ「大部門化」等、研究組織を弾力化するための措置について

a. 共同利用研究室（中央機器管理室）を大規模とすることにより公益性の点で効果をあげている。
b. 研究組織を弾力化する観点から、研究目標が明確な比較的小規模な研究チームの活動を支援する方向にある。一方、寄付講座の設置基準(3000 万円 / 年）の引き下げなどが検討課題である。
c. 企業からの研究員として優秀な人材を確保するための努力を行っている。
・教授職から特別研究員まで職位を付与して、インセンティブを与えている。
・特別研究教員等の任用制度の改正により、特別研員の給与設定が、プロジェクト毎に柔軟に設定されるようになった。
・同様に、特別研究教員の任期が 5 年から 10 年に延長された。

【競争的な研究環境を創出する視点から考えた今後の課題】

ア　海外からの留学生の受入れについて

留学生受入れについては、絶対数が少ないことが問題点として挙げられる。米国における基礎研究の推進力がアジアを含む諸外国からの留学生（大学院生ポスドク等）であることを認識し、当大学においても、今後は一層多くの留学生を積極的に受入れ、サポートする体制を確保することが重要であると考えられる。この点に関して、大学院入学試験から、日本語語学試験を除外した点は評価される。さらに、学内の英語表示の徹底等、受入れ体制の整備が必要と考える。

イ　社会人大学院生制度の導入等、柔軟な組織作り

信州大学等では、夜間大学院生の導入により大学院充足率を倍増させている。今後の検討課題である。

ウ　その他

TLO（知的資産センター）の設置は早稲田大学が 1996 年、本学は 1998 年であり、本学は全国で 3 番目である。医学部からの特許申請は 40 余件あり、今後市場ニーズに合った商品や技術を見抜く力が必要と考えられ、企業での勤務経験を有する人材をファカルティーに登用することなどが今後の検討課題である。

研究資金配分・受入状況

	２０００年度		２００１年度		２００２年度		２００３年度	
	件数	金　額（単位：千円）	件数	金　額（単位：千円）	件数	金　額（単位：千円）	件数	金　額（単位：千円）
福沢基金	23	15,003	22	13,822	21	8,580	26	17,908
小泉基金	35	7,634	31	5,091	35	5,266	28	4,803
医学振興基金	23	52,000	10	27,000	2	15,000	0	0
大型研究助成	3	44,400	—	—	2	17,610	2	34,590
文部省科学研究費	302	744,709	305	898,800	308	983,600	286	874,200
厚生省科学研究費	19	399,400	26	531,904	76	815,806	310	929,118
受託研究費	79	163,093	113	305,245	78	326,391	70	187,216
官公庁受託研究費	12	860,317	11	715,413	16	968,801	22	2,276,405
共同研究			12	468,000	20	783,000	37	792,060
助成金	25	40,900	26	33,650	32	65,100	36	55,110
奨学寄付金	952	1,023,009	910	1,390,763	906	1,279,693	1161	1,345,964
合　　計	1,473	3,350,465	1,466	4,389,688	1,496	5,268,847	1,978	6,517,374

(5)　研究論文･研究成果の公表を支援するための措置や大学･研究機関間の研究成果を発信･受信するシステムの整備

医学部は英文雑誌（The Keio Journal of Medicine）を年 4 回発刊しており、既刊号も 1999 年まで遡って閲覧できるようホームページが整備されている。また、2004 年 1 月 28 日より、The Keio Journal of Medicine を PubMed 文献検索システム（世界約 70 カ国、4,500 誌近い雑誌に掲載された文献を検索できる医学文献データベース）で検索できるようになったこともあり、研究成果の発表の場として確立しつつある。また、学術団体慶應医学会は年 4 回和雑誌「慶應医学」を発刊しており、随時開催される講演会の支援、年一回のシンポジウム開催等の活動をして、医学情報を学内のみならず学外にも広く伝えている。

また、慶應医学会は、「投稿論文掲載料補助」を行っている。これは、著者の掲載料負担軽減を目的とし、2001 年までは原著論文、2002 年からは投稿された全ての論文（綜説、講座、原著、学位論文）に対し、3 万円の補助を支給している。

2000 年（77 巻）16 件：原著論文のみ補助
2001 年（78 巻）　6 件：原著論文のみ補助
2002 年（79 巻）60 件：全ての投稿論文補助
2003 年（80 巻）33 件：全ての投稿論文補助

本医学部には、広く医学界に所属する人々を対象とした「医学・生命国際シンポジウム」がある。内外の医学関係機関、団体と連絡提携をとり、世界の医学・生命科学の重要かつ先端的分野における研究者を招聘し、シンポジウムおよびフォーラム等を開催することにより、医学国際交流の促進を目指して慶應義塾医学振興基金が主体となって開催している。最近のシンポジウムは以下の通りである。

第 11 回国際シンポジウム「聴神経腫瘍の報告システムに関するコンセンサス会議」2001 年 11 月
第 12 回国際シンポジウム「視覚初期過程の神経基盤」2002 年 9 月
第 13 回国際シンポジウム「人工酸素運搬体の創生と開発その最前線」2003 年 2 月
第 14 回国際シンポジウム「Organ Microcirculation: A Gateway to Diagnostic and Therapeutic Interventions」2003 年 12 月

総合医科学研究センターでは内部の研究者を対象者としたオープンセミナーを毎月 1 回開催している。2002 年 7 月から 2004 年 3 月までに既に 18 回を数える（講演者内訳、塾内 9 名、塾外 9 名）。毎回 50 名程度の参加があり、活発な質疑応答が行なわれている。

また、学内に先駆けて研究業績データベースを立ち上げており、現在まで 6 万件余のデータベースが公開されている。
収録年 1995 年度～ 2002 年度
収録内容
著　　書：図書全体および一部を執筆したもの。編・訳・監修も含む。
論　　文：学術雑誌（学会誌・商業誌）、一般雑誌、政府機関報告書等に掲載されたもの。
学会発表：学会で発表されたもの。筆頭発表者が慶應義塾大学医学部在籍者以外の場合を含む。
　　慶應義塾大学医学部年報の掲載基準を満たした業績のみを収録対象としている。

研究を受信するシステムに関しては、慶應義塾大学医学メディアセンター（北里記念医学図書館）が整備されており、電子ジャーナルで約 5000 誌（2004 年 3 月現在）の医学・生物学系の雑誌をキャンパス内のどこからでもインターネットで接続すれば閲覧できる。

(6) 研究等における倫理性の確保

1964 年にフィンランド・ヘルシンキの第 18 回 WMA 総会でヒトを対象とする医学研究の倫理的原則が採択された。慶應義塾大学医学部では倫理委員会内規が 1986 年 1 月 20 日に制定され、1986 年 6 月に 1 件の倫理審査が行われたが継続審査となった。以後年を経るごとに倫理審査の申請が増え、2003 年では年間の新規審査及び再審査を含めて 132 件の申請があった。2003 年の採択率は 78％であった。倫理委員会は年間 11 回（8 月以外の毎月）の委員会を開催し、学外委員を含む各委員は申請者の研究または医療計画が倫理的条件を満たしているかの議論を重ねて判定を下している。
2000 年からの審査と結果は下記のとおりである。

（件）

	2000 年	2001 年	2002 年	2003 年
新規審査・再審査	43	94	91	132
承　認	29	86	74	103

ヒトＥＳ細胞の取り扱いについても、ヒト胚性幹細胞に関する倫理専門委員会が発足し、議論を重ね、文部科学省に実験申請を行い、許可を得ている。これまでに、２件申請があり、２件採択されている。これらの委員会の内容については、ホームページで公開されている。

また、マウスなどの動物実験に関しては、医学部動物実験ガイドラインに基づき、動物実験委員会において動物実験計画書の事前審査を行っている。実験実施者は動物実験講習の受講が義務付けられている。

動物実験計画書の件数

	動物実験計画の承認（新規）	実験実施者の登録
1999 年	228 件（228）	92 名
2000 年	203 件（64）	116 名
2001 年	198 件（74）	246 名
2002 年	168 件（73）	251 名
2003 年	141 件（66）	403 名

（動物実験計画書は毎年更新。また、実験実施者の登録は５年間有効。）

Ⅴ　学生の受入れ

(1)　学生募集･入学者選抜方法

大学院博士課程では、従来 12 月初旬の数日間に学生を募集し、1 月中旬の筆記試験と口頭試問で入学者を選抜してきた。しかし、出願期間が短いことや年 1 回の選抜試験では多くの優秀な学生、特に学外の学生を集めることが困難なことから、2004 年度からは 9 月と 1 月の 2 回に分けて選抜試験をすることとした。また、これまで外国人留学生については、英語に加えて日本語試験を実施してきたが、より広く学生を受入れるという観点から、2004 年度からは日本語試験を廃止し、英語試験のみとした。大学院修士課程に関しては、9 月に英語試験と自然科学の一般常識の筆記試験と小論文、面接を行ってきた。しかし、修士課程を希望する学生のバックグランドは文科系の大学卒業者も含めて広範囲に亘っており、受験生の間では「本塾大学院修士課程の試験は難しい」との風評があり、受験を敬遠する学生も多いとされていた。そこで、2004 度からは自然科学の一般常識の筆記試験を廃止し、面接時に自然科学の知識を試問することを決定し、応募学生層の拡大を目指すこととした。2004 年度からの学生募集・入学者選抜方法の改訂により、応募学生数の増員とより優秀な学生の選抜が可能になると考えている。なお、修士課程に関しては、学士課程の３年生時に全単位を取得した成績優秀者に対して「飛び入学」を認めているが、成績優秀者等の学内推薦制度は採用していない。

(2)　入学広報

大学院博士課程および修士課程の広報は、主として慶應義塾大学大学院案内で行われてきた。しかし、本大学院案内は全学的な総合冊子であり、医学研究科についての情報が必ずしも十分に伝えられていないという問題点があった。そこで、2004 年度の入試については、公開の大学院説明会を開催し、各研究室の紹介をまとめた冊子を配布する試みを行った。この説明会や冊子をきっかけに今年入学した大学院生もおり、一定の効果はあったものと思われる。また、2005 年度の入試に合わせて、慶應義塾大学大学院総合案内と医学研究科案内（分冊）に分けて発刊し、分冊において研究科委員のプロフィルや研究テーマなどの情報を載せたより詳しい大学院案内の作成している。さらに、各研究科委員の研究テーマの情報や直接アクセスできるホームページの開設を進めている。

(3) 学部・研究科等の理念·目的·教育目標と学生受入れ方針の関係

大学院博士課程と修士課程では、学力のみならず本研究科の理念・目的・教育目標に合致するかを面接時に試問することで、適切な学生を入学させている。また、博士課程には専攻生制度を設けており、指導教授ならびに関連教授２名以上の承認を得て大学院医学研究科委員長へ申請し、審査により承認している。

(4) 塾内高校からの学部進学

(5) 特別学生受入れの状況

大学院博士課程および修士課程では、特別学生の受入れを特に行っていない。

(6) 留学生入試・外国人学生受入れの状況

大学院博士課程では、2000 ～ 2003 年度における外国人留学生は１～３名（在校生の 0.6-3%）と少ないのが現状である。外国人入試にあたってはこれまで英語試験に加えて日本語試験を課していたことが一因と考えられる。2004 年度からは日本語試験の廃止を決定したことから、今後は、外国人留学生は増えるものと期待される。修士課程においても、外国人留学生の比率は在校生の 4 ― 8% と必ずしも多くはないのが現状である。しかし、2004 年度から自然科学の一般常識の筆記試験を廃止することから、外国からの留学生の応募者の増加が期待される。一方、留学生の質の低下を防ぐ観点から、修士課程と博士課程の教育年数を我が国と同等（それぞれ 16 年と 18 年）またはそれ以上であることを課している。

(7) その他の特記事項

医学研究科博士課程では、社会人入学は行っていない。学生定員の充足率は、2000 ～ 2001 度はいずれも 41% と低迷していたが、2003 年度には医学研究分野で 21 世紀 COE を 2 部門で獲得したことから、57% に増加している。一方、2004 年度から初期臨床研修が必修化することから、大学医学部の臨床部門の運営が大きく変動しており、初期臨床研修を終了した医師の後期臨床研修コースと大学院博士課程進学の棲み分けを考慮した善後策を構築中である。また、修士課程学生の博士課程への進学率の増加を推進するために、修士課程学生を対象にした慶應大学医学部同窓会（三四会）による奨学金制度の導入などを計画している。大学院博士課程では、2000-2003 度における他大学出身者の割合は例年 35% 前後であった。しかし、2004 年度より入試の時期を９月と１月の前後期制にすることにより、特に前期の試験で他大学出身者の入学が増加すると期待している。大学院修士課程では、2003 年度の充足率は 65%（26 名）であり、本塾出身者は 3 名と少なく他大学出身者が 88%（23 名）、外国人留学生が 4%（1 名）となっている。

(8) 退学者の状況

医学研究科博士課程での過去 4 年間における退学者の割合は、2001 年度の 2.7% が最高であり、他の年度では 0.7 ― 1.7% と比較的少ない状態である。また、修士課程では、過去 4 年間の退学者が１名と退学の率は極めて低い。

Ⅵ　教育研究のための人的体制

(1)　教員組織

近年の医学教育において専門分化している現状では、専任教員の雇用者数には自ずと限度があることから、非常勤教員の占める割合は決して少なくない。学生自体も基礎的な教育の習熟は当然のこととして、より専門特化した教育を求めており、実務家教員、外国人教員などによる教育、任期制等教員の任用を積極的に行うことにより、多様なかつ多面的な教育を可能にしているといえよう。また、信濃町キャンパスリサーチパークで企業と共同研究を行なうにあたり、企業から参加する研究員については、従来の医学部の講座・教室に属することなく有期契約教員等を採用でき、研究者、ポスドク、研究支援者等を柔軟に採用できる仕組みを整えている。(特別研究助手 26 名、訪問教授 6 名、訪問助教授 3 名、訪問講師 11 名、訪問研究員 13 名、共同研究員２６名)

・専任教員と非常勤教員の人数比(5 月 1 日現在)　　(人)

	2000 年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度	2004 年度
専任教員	508	511	516	518	508
非常勤教員	367	348	336	358	384
比率(専/非)	1.38	1.46	1.53	1.44	1.32

＊信濃町、日吉、月ヶ瀬、伊勢(2003 年 9 月末閉院)

ア　大学院における教員と学生の比率については、指導教授（研究科委員）42 名程度（年度により若干の増減あり）に対して博士課程学生が 12 年度 113 名、13 年度 112 名、14 年度 137 名、2003 度 153 名であり、その他多数の助教授及び講師も授業を担当している（添付資料：設置授業科目と担当者参照）ことから、指導上適切な比率になっていると考えられる。

イ　大学院における主要な授業科目への専任教員の配置状況は当研究科報告末尾の添付資料「設置授業科目と担当者」の通りであり、適切であると考えている。今後は、専門分野が多様化し、融合・境界領域も増えている状況をふまえ、他の研究科との乗り入れ（一部既に理工学研究科、政策メディア研究科、先端生命科学研究所と連携して実施している）や非常勤教員等を活用して、より充実した体制を目指して継続的に努力していきたい。また、このほかに、大学院特別講義の枠等を利用して、学外の専門家による最先端の研究についての講義を随時依頼し、実施している。

(2)　研究支援職員･組織の充実度

文部科学省学術フロンティア構想に基づき、医学系、理工系、人文社会学系、および環境情報工学系の融合研究を発展させ、慶應義塾大学から創出した生命医科学の研究成果を広く社会に還元し、その健全な発展に寄与することを目的に新たな研究拠点として総合医科学研究棟が建設(2001 年度）された。融合研究の場としてのリサーチパークの運用とあいまって設立された医学部における戦略研究推進組織としての「総合医科学研究センター」の発足を契機に総合医科学研究棟内に研究支援センターを移設し、2002 年度では a. 公的補助金に基づく研究支援約 370 件、b. 各種研究助成金に基づく研究支援・受託研究支援・共同研究支援約 180 件、c. 各種寄付金受入

れ約1030件､d.寄付講座約３件、を主な取り扱い業務として対応している。研究支援センターは、従来単なる資金管理の部署であったものが、最近では幅広い専門性が求められてきており、正直なところ現状では増大する資金の管理に追われがちな部分もある。研究プロジェクトのコーディネイトなどリエゾン活動などを今後充実させていきたい。さらに、各種研究契約関係の法務的知識が不足しているため、専門家の支援を得て、直接の研究をサポートできるような体制をさらに整えたい。

なお、研究支援センターのみならず、用度課・経理課・人事課などの関連部署が研究費支払い業務や人的雇用関係のサポートなどを行っており、事務部門が一体になって研究動向の趨勢に応じて必要で的確なサービスを図るべく日々努力している。

(3) 実験･実習等を伴う教育実施上の人的補助体制の整備状況

(4) TA 制度･ SA 制度・RA 制度

医学研究科では、2002 年度には生命科学分野で１件、2003 年度には医学研究分野で２件の COE を獲得しており、これらによる RA 制度の導入に伴い、2002 年度は 21 名、2003 年度では 82 名の RA を採用しており、その数は飛躍的に伸びている。本 RA 制度では、学生の研究プロジェクトに従事する程度により、月額５万円、10 万円、20 万円の給与を与える非常勤嘱託として採用している。また、TA 制度により月額２万６千円を数名の大学院博士課程学生（2000 － 2003 年度、８ － ４名）に支給している。

(5) 教員の募集･任免･昇任

教授会で承認された個々の選考委員会（専任講師任用については教室・部門内に設置）において、教授・助教授・専任講師の募集・任免・昇任に関する基本方針を設定し、その適任者を推薦・公募などで選考、最終的に教授会で対象者の任用について審議している。

選考は学内・学外、また国内・国外を問わず広く対象者とし、教育・研究・診療などバランスのとれた人材の任用にあたっている。特に、最近では教授の選考にあたっては、候補者が教授会においてプレゼンテーションを行い、自己の姿勢をアピールする場を設けて教授会メンバー全員にその信を問うステップを踏んでいる。欠員の補充には速やかに対応する姿勢ではあるが、適任者の選考を拙速に行うことは避けているため、結果として空白期間が生じることはやむを得ないことと受け止めている。研究科博士課程と修士課程の研究科委員は、医学部教授を対象として研究科委員会の選考委員会が候補者を推薦し、研究科委員会で選任している。

(6) 任期制、有期契約教員等、教員の流動性を促進する制度および任用の状況

(7) 教員の教育･研究活動や研究活動の活性度合いについての評価方法

医学部においては、全ての教員に対して各年度ごとの発表論文リストの提出を求めている。これによる１年ごとの評価は行っていないが、助手から院内講師や専任講師への昇任の際には論文発表による研究活動の厳密な審査と講義担当数やカリキュラム編成などによる教育活動を評価し、昇任と継続を審査している。助教授や教授レベルでは、研究・教育・診療での活動を選考委員会により厳しく審査することで選任している。教育活動の評価は自己申告による講義数のみでは把握が困難なことから、学生によるアンケートによる講義内容の評価を行っている。ただし、

評価結果を教員にどのようにフィードバックするかについては十分に具体化されていない。

(8) 学内外の教育研究組織・機関との人的交流の状況

長期・短期を含め多くの人材を外部組織・機関に派遣している。人材という資産を医学部内のみで活用するのではなく、外部組織・機関との交流を行うことで、教育研究組織である医学部の使命を果たしているといえる。医学部および研究科の教員は、他大学や大学院の特別講師、客員教員、非常勤講師など、極めて多くの役職を兼任している。

	2000 年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度
交流(派遣)人数	579	616	491	583

Ⅶ 施設・設備等

Ⅶ－１ 施設・設備等の整備

(1) 教室等の量的・質的充実度、稼動状況および将来計画

総合医科学研究棟一階には硝子張りのラウンジが設けられており、普段は学部学生や教職員に開放されているものの、大学院生を対象としたセミナーや講演会、研究報告会が頻繁に開かれている。また、必要に応じて、その他の講堂や会議室も利用されている。ラウンジは密に稼働しており、このような居心地の良い多目的施設の充実が将来的にも必要であろう。

(2) 学生・教員に対する情報機器の利用環境・機器配備状況

信濃町ｲﾝﾌｫﾒｰｼｮﾝﾃｸﾉﾛｼﾞｰｾﾝﾀｰ（ITC）・WS システムに利用登録している場合、使用可能となる情報公開コンセント及び PC システムは以下の場所に設置されている。(基本的に 24 時間利用可能)

情報公開コンセント設置場所

東校舎２階講堂	１４９席
孝養舎２階自習室	３６席
信濃町メディアセンター１階閲覧室内	１６席
第２校舎 PBL ルーム	４８席

PC システム設置場所

設置場所	PC	ﾈｯﾄﾜｰｸﾌﾟﾘﾝﾀ	他
新教育研究棟５階自習室 B	24 台	1 台	
信濃町メディアセンター１階閲覧室内	19 台	2 台	スキャナ 2 台 1.3G 対応 MO ﾄﾞﾗｲﾌﾞ 3 台 ﾒﾓﾘｰｶｰﾄﾞﾘｰﾀﾞ/ﾗｲﾀ 2 台
第３校舎地下１階 PC 室	8 台	1 台	
孝養舎４階 403、404 教室	116 台	2 台	
貸し出し用 PC	70 台		

(3) 施設･設備の社会への開放に対する配慮

一般に、社会への施設・設備の開放は進んでいない。

(4) 記念施設･保存建物の保存･活用の状況

該当するものはありません。

(5) 大学院の専用とするべき施設･設備の整備状況と将来計画

フォローサイトメトリーコアファシリティーやセルプロセシングセンター、ＧＭＰレベルベクター作製研究室などは、大学院以上のレベルで使用するべき施設・設備であり、現在整備が進んでいる。これらは必ずしも大学院の専用ではないが、柔軟な運用が研究の活性化に結びつけられている。施設・設備等の維持・管理は、基本的には受益者負担の原則で進められている。それぞれの施設・設備で利用者の数や使用頻度、専属担当者の有無などの状況を勘案し、現状にあった対応がとられている。将来的には、さらに受益者負担の傾向が強まる方向にある。

(6) 大学院学生用キャレル･実習室等の整備状況と将来計画

大学院学生は、原則としてそれぞれ所属する研究室で、デスクや実験台を供与されている。また、総合医科学研究棟には汎用性のあるセミナー室が多数用意されている。これとは別に、別館２階には、大学院学生用キャレルと実習室が整備されている。

(7) 夜間の教育研究を円滑に行うための施設･設備･サービス提供

医学部 RI 使用施設は、登録者が１週間に 40 時間を超えない範囲内ならば、夜間でも研究が行えるように、入退出の管理を個人別に行っている。また、中央機器室も 24 時間利用可能であるようにセキュリティーシステムが稼働しており、機器使用の予約もホームページから行うことができる。機器・設備は専任のスタッフによって整備され維持されている。

(8) 本校以外にも拠点（サテライト等）をもつ大学院における教育研究指導環境の整備状況

Ⅷ－２　キャンパス･アメニティ等

(1)　学生の福利厚生のための施設･設備の充実度と今後の課題

学生の居場所を確保するための様々な配慮がされている。総合医科学研究棟前のベンチの設置や、総合医科学研究棟１階のラウンジの開放などが挙げられる。また、コンビニエンスストアなどの充実も図られている。それでも学生の居場所は充分でなく、くつろいだ雰囲気の中で教員を交えたディスカッションのできる空間などの整備は今後の課題である。

(2)　大学周辺の「環境」への配慮

音、光、組み換えDNA実験などについて、大学近隣の住民への配慮がなされている。また、キャンパス内の緑化についても考慮されている。

Ⅷ－３　利用上の配慮、責任体制

(1)　障碍をもつ学生･教職員への施設･設備面での配慮

随所でバリアーフリー化、ドアの自動化、手すりの設置などが進められている。

(2)　各施設等の利用時間帯の配慮

セキュリティーシステムの構築やコンピュータによる予約や管理と組み合わせることで時間的に柔軟な利用が可能になるように配慮されている。

(3)　大規模地震等の災害への危機管理対策

(4)　実験等における危険防止のための安全管理･衛生管理･環境被害防止の徹底を図るための制度の確立状況

以下のソフト、ハード面の対応を行っている。

ア　危険物の取扱いは指定の保管場所、保管棚転倒防止、保管容器破損防止及び、指定数量について管理している（防災センター）。また、研究棟内のインシデントレポート制度により、関連事故の情報の共有化による安全・防災意識の向上に努めている。

イ　この他、設備面のセーフティー対策として電灯・コンセント設備は系統別に漏電ブレーカーを設置し、火災・感電・他の研究室や建物などへの波及事故の防止を図っている。

ウ　給水設備は受水槽・高架水槽の点検清掃と水質分析を定期的に実施し、安全管理を図っている。

エ　排水設備は排水槽の点検清掃と排水分析を定期的に実施している。また、特殊排水は貯留槽に溜め、定期的に外部施設で委託処理し、安全管理を図っている。

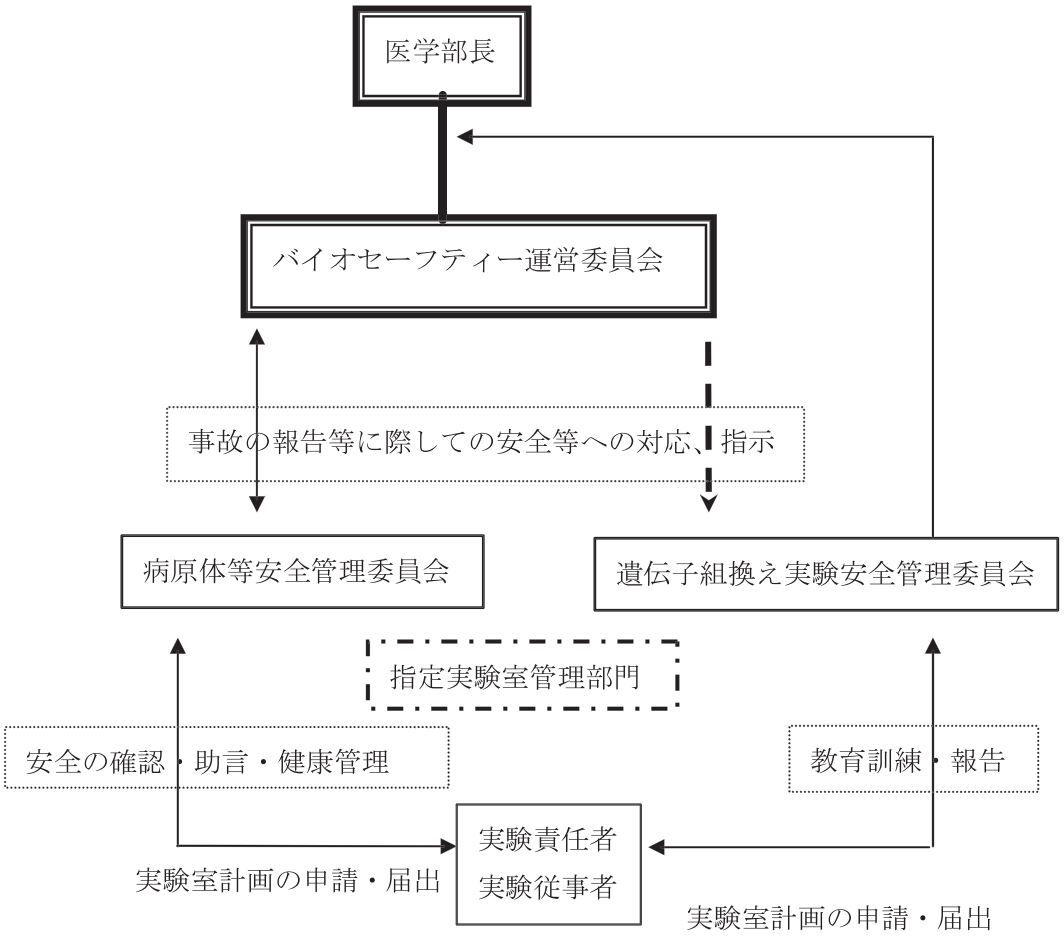
オ　冷却塔の点検清掃と水質分析を定期的に実施し、安全管理を図っている。

カ　実験室から出た不要薬品や有機溶媒などの廃液は３ヶ月に一度定期的に回収し、さらに医療系廃棄物は特定の形状（黄色半透明ポリ袋、針付きのものはポリ容器）で回収し、外部委託処

理をしている。
キ　RI 施設は放射線安全管理室で安全な施設管理をしている。

また、医学部内においてバイオセーフティー運営委員会を設立し、内規等を制定して、各研究者に情報を周知し、委員会で実験についての審査、確認を行なっている。

慶應義塾大学医学部バイオセーフティー運営委員会組織図



Ⅷ　図書館および図書等の資料、学術情報

(1)　図書館資料等の質および量（コレクションマネジメント）

(2)　図書館施設の規模、機器･備品の整備状況（ハードウエア）

(3)　図書館サービスの状況（ソフトウエア）

(4)　学外との相互協力、社会貢献（アウトリーチ）

Ⅸ　社会貢献

(1)　社会人向け教育プログラム･公開講座の開設状況

北里柴三郎博士生誕150年記念講演会（2003年9月20日、北里講堂、東校舎に中継）では400人の参加者があった。また、再生医療・治療研究開発センター公開シンポジウムは、2002年3月に249人、2003年3月では184人の参加者があった。今年のＣＯＥプログラムと再生医療・治療研究開発センターとの共催での公開シンポジウムには233人の申し込みをうけている。さらに、慶應医師会は年一回市民公開講座の開催等を通し、医道の高揚ならびに医学・医術の発達普及を促進し、あわせて公衆衛生の向上をはかることによって社会福祉に寄与することを目的に活動をしている。

慶應医学賞での公開シンポジウムには、
2001年　第6回　120名
2002年　第7回　120名
2003年　第8回　253名の参加があった。

その他、総合医科学研究センターでは、ベンチャー企業の起業・発展の仕組、バイオビジネスの状況、ベンチャー企業の経営をはじめとし大学発のベンチャーに必要な情報を得るため、慶應義塾大学知的資産センターと共催して2003年８－９月に全７回のベンチャー入門講座を開催した。

(2)　企業との連携としての寄付講座の開設状況

現在医学部ではツムラ東洋医学寄付講座、ファイザー成長・発達寄付講座、サントリー心臓病先進治療学寄付講座の３つの寄付講座が活発に活動を行なっている。

ア．ツムラ東洋医学寄付講座

＜研究＞
研究は漢方薬の作用機構を探索するための基礎研究と臨床的エビデンスを蓄積するための臨床研究を２つの柱とする。

a. 基礎研究に関しては、複合物である漢方薬に対し複雑系である生体がどのような反応を示すのかに関しては個々のマーカーを見るのではなく、遺伝子発現を網羅的に観察し、さらに臓器間での相互関連につき検討する。
b. 臨床研究に関してはこれからの医療ニーズに応えることのできるように高齢者、がん、生活習慣病などに対する漢方薬の効果につき検討する。

＜教育＞
全国医学部長･病院長会議によって提唱されたコアカリキュラムに東洋医学が盛り込まれたことで東洋医学に対する医学教育の必要性が強調されるようになってきた。

それを受けて当寄付講座では医学部教育ならびに卒後教育に力を入れる予定である。

a. 卒前教育　臨床に直結する従来の講義に加え、科学的根拠に基づいた漢方薬の理解につき強調し、義塾における東洋医学教育の特色としたい。
b. 卒後教育　コアカリキュラムに取り入れられた事を受けて各大学で東洋医学の講義を開始したが、教える側の教員が不足している。そこで当講座では東洋医学研修生を募集し、教員となるべく人材の養成を図る。

イ．ファイザー成長・発達寄付講座

講座は、ファルマシア株式会社から寄贈される資金をもって設置され、成長・発達領域における先進的研究・教育・診療を行い、慶應医学の発展に貢献することを目的とする。本講座の最も重要な事業は、成長発達に関わる疾患の正確な診断システムを確立することである。成長障害、性分化障害、高次脳機能の発達障害、形態形成異常を有する児を主たる対象として、分子生物学的手法、中枢神経系の定量的イメージングを駆使し、正確な診断と病態生理の解明を進めている。現在、成長・発達を包括的に診断する施設は見当たらず、本講座はこの分野の世界における先進的施設となることを目指す。

ウ．サントリー心臓病先進治療学寄付講座

サントリー寄付講座Ⅰ、Ⅱでの実績を踏まえ、本講座Ⅲにおいては１）基礎領域では心筋再生医療の実用化に向けて不可欠な課題である「再生心筋細胞の電気生理学的検討」を主題とし、電気生理学的に安定し、移植後に催不整脈性のない良質な再生心筋の開発を目指し、２）臨床領域では致死的不整脈に対する先進的非薬物療法の開発を目指す。

(3)　研究成果の社会への還元

・　学外研究機関･社会組織体との教育研究上の連携策

連携大学院構想について

本構想においては、当学部と関連の深い学外研究組織との間で協定を結び、当該研究組織の主たる研究者に対しては医学研究科としては研究科委員（客員）学部においては客員教授としての称号を付与し、本学研究科委員との間で教育研究の両面で連携を図るものである。このような連携により、以下のような利点が生じる。

a. 新たに複合的研究教育グループの編成
b. 研究科委員の研究領域が多様化されることによる学位審査の充実化
c. 学外研究者の学位所得の可能性（研究機関の算定などを含め）
d. 大学院学生の研究領域の多様化に対応

現在、北里研究所および実験動物中央研究所との間で連携の協定を結んでおり、その成果の一つとして、2003 年度に始まった２つの文部科学省 21 世紀 COE プログラムである「幹細胞医学と免疫学の基礎・臨床一体型拠点」と「低侵襲・新治療開発による個別化癌医療確立」の拠点形成において、研究、教育の両面から極めて円滑かつ有効な協力体制を構築することに役立っている。実験動物中央研究所に導入された動物用 MRI の施設はこの連携関係を生かして設置され、

活用されている。今後も他の施設との連携体制を造るべく、現在協議中である。総合医科学研究棟の中央機器は、理工学部の大学院生や研究者に対しても開放されている。

公衆衛生学では、高知県、群馬県、東京都三宅村などの現場で、健康調査や健康リスクコミュニケーションなどを通じて社会貢献と研究教育を行っている。

・　企業等との共同研究、受託研究の規模･体制･推進の状況

総合医科学研究センター内のリサーチパークにおいては、企業との共同研究を行なう場として55のユニットが用意されている。企業と３年から５年を期間とし、平均年間２千万円程度の共同研究がすすめられている。2003年３月現在で次のプロジェクトが進行している。「体性幹細胞」（協和発酵工業株式会社）、「循環器領域における MDCT、MRI を用いた新しい画像診断検査体系の確立」（ＧＥ横河メディカルシステム株式会社）、「Sentinel node navigation surgery の臨床応用に向けた微量癌細胞定量的迅速検出法の開発と実用化」（ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社）、「ＭＢＬ樹状細胞プロジェクト」（株式会社医学生物学研究所）、「テレヘマトロジ―システム研究プロジェクト」（シスメックス株式会社）、「神経幹細胞の分化に関わる分子の探索と創薬への応用」（武田薬品工業株式会社）、「トランスフェクションマイクロアレイシステムを用いた神経幹細胞の分化誘導の解析」（株式会社イニシアム）

(4)　特許･技術移転その他知的資産

学内に知的資産センターが設立されている、逐次相談にのっており、特許申請業務やリエゾン活動などを行なっている。

・　特許･工業所有権の取得状況

2002年	６件
2003年	２件
合計	８件

・　収入の研究費への還元状況

2000年度：０円
2001年度：　2,550,000円（　１件）
2002年度：15,300,000円（　９件）
2003年度：　5,191,479円（13件）

(5)　産学連携と倫理規定

X　学生生活への配慮

(1)　学生生活支援の基本的な考え方

(2)　課外活動･課外教養の指導･支援

(3) 奨学制度

(4) 就職（進路）指導

医学研究科は、多くの大学院生が臨床医であり、卒業後は大学助手または関連病院医師として勤務することが通常である。そのため、本人の希望を尊重したうえで就職先の病院を相談し、決定している。基礎医学の大学院生については、多くがポスドクや研究員、大学助手等として次の研究職に就く（留学を含め）ため、申請・応募のための指導を特に最終年度に行っている。

(5) 学生の心身の健康保持･増進への配慮

・　学生の心身の健康保持・増進及び安全・衛生への配慮の適切性

保健管理センターにて健康診断など各種検査を行っている。その他、学生の心理面についてはストレス・マネジメント室を設置し、カウンセラーがケアに当たっている。また、学習上の悩みを抱える学生については学習指導委員が面談などを行いサポートしている。

・　ハラスメント防止のための措置の適切性

慶應義塾大学ハラスメント防止委員会が「セクシュアル・ハラスメント防止のためのガイドライン」に沿って作成したリーフレットを毎年学生に配付している。また被害にあった場合には信濃町キャンパスに設けられている相談窓口に限らず、他地区の窓口、所属長、三田ハラスメント防止委員会事務室のいずれかに相談するよう指導している。

(6) 学生生活支援を効果的に行うための組織体制

Ⅺ　管理運営

(1) 評議員会、理事会等

(2) 塾長選挙、評議員選挙

(3) 教授会・研究科委員会等

・　大学院研究科の教学上の管理運営組織の活動の適切性

研究科委員会の構成メンバーは 2002 年度までは 36 名であったが、研究分野の専門化と多様性に対応させるために、2003 年度から救急医学、臨床検査医学、薬剤学、歯科・口腔外科学の 4 名の研究科委員が新たに選任された。また、本医学研究科における学位審査では必要に応じて他大学の研究者や学内の助教授・講師クラスの教員を加える制度を導入しており、これらの委員の努力により適切に機能していると評価している。

・　大学院の審議機関の長の選任手続きの適切性

研究科委員会の委員長は、大学院学則に従い研究科委員会委員の互選によって適切に選出されている。

(4)　研究科委員会と学部教授会との相互関係

学部教授会のメンバーのうち診療教授と包括医療センター教授を除いた 40 名の教授が研究科委員であり、教授会と研究委員会との相互関係は適切に保たれている。

(5)　学部・研究科等の意思決定プロセスの透明度等

医学研究科では種々の問題に関して十分な議論がなされており、意思決定プロセスの透明度は高いと考えられる。問題提起された課題については、上申機関である 10 名の研究科委員から構成される「研究委員会」で十分に論議し、その結果を医学部運営会議と研究科委員長に上申している。さらに、その内容を 7 名の研究科委員からなる「大学院検討委員会」で討議・提案し、その原案を「研究科委員会」で審議後に決定している。このような本塾医学研究科の意思決定プロセスは他大学に例のない優れた方法と考えられる。

(6)　大学評議会等全学的審議機関の権限の内容と運用

(7)　教学組織と法人理事会との間の連携協力関係･機能分担･権限委譲

(8)　管理運営に関する学外有識者の関与の状況

(9)　危機管理体制の整備状況

Ⅻ　財 政

Ⅻ－１　教育研究と財政

経常予算では不足なため外部研究資金に依存している。しかし、教育のための資金を外部資金に依存することは現実的といえない。塾が、年度毎に教育上の明確な重点項目を明らかにし、経常予算を投入するべきである。一方、研究については従来通り、外部資金を積極的に導入することが重要である。国立大学に様々な制約があったことから、日本企業の多くは海外の大学へ委託研究を発注していた。慶應義塾大学は従来から「産学連携」の立場にたち、企業からの委託研究費を受入れており、その比率も多いことは評価される。

Ⅻ－２　外部資金等

(1)　文部科学省科研費、外部資金（寄付金、受託研究費、共同研究費等）の受入れ状況

外部資金の適切な管理を行なうため外部資金管理システムを入れてリアルタイム管理を目指している。指定寄付についてもオーバーヘッドを徴収することになったのを機に「リアルタイム管

理」を「目指す」のではなく、「実現」すべく検討中である。このように研究者にとって目に見えるサービスを提供し得ない限り、オーバーヘッドが単なる「所得税」となってしまう懸念があり、オーバーヘッドを負担する研究者が「受益者」となりうるシステムを目指す必要があると考えられる。

Ⅻ－３　予算配分･予算執行のプロセスの透明性

予算は執行段階で管理。経理規定に則り稟議手続きしている。

オーバーヘッドを徴収し、共同利用研究施設としての中央機器管理室や学部内での受託サービスを充実させるべく努力している。真に必要なサービスを提供するために、何が必要とされているかを広く調査している。しかし現在、中央機器管理室の機器の機器別利用状況に依然として大きな偏りがある。利用状況を再調査し、リソースの再配分を行うことが望ましい。そのプロセスの透明性を確保することが重要であると認識している。

Ⅻ－４　財務監査

Ⅻ－５　財政公開

Ⅻ－６　私立大学財政の財務比率

ⅩⅢ　事務組織

ⅩⅢ－１　事務組織と教学組織との関係

ⅩⅢ－２　事務組織の役割

(1)　学部・大学院の教学に関わる事務組織体制と企画･立案･補佐機能

事務組織体制としては学事課が主管部署であり、教授会を中心として変革される教育について企画・立案・補佐機能を担っている。

(2)　予算編成過程における事務組織の役割

人件費予算は主として人事課が編成し、物件費に関しては用度課が関与している。最終的に予算を総括するのが経理課であり、執行部に対して案としてまとめたものを説明・調整し、それを三田の経理部へ報告することになる。

(3)　国際交流･入試･就職･研究支援等の専門業務への事務組織の関与の状況

ⅩⅢ－３　事務組織の機能強化のための取組み

XIV　自己点検・評価

(1)　恒常的な自己点検･評価システムの確立状況

慶應義塾大学はこれまで自己点検・評価を受けたことがなく、自己点検・評価システムは十分に確立されているとは言えない。

(2)　自己点検･評価の結果を将来の改善･改革につなげるための仕組み

今回初めて自己点検・評価を受けるにあたり多くの項目について自己点検・評価したことから、これを恒常的に生かせるシステムの構築を考えている。

(3)　学外者を含めた委員会の設置など、自己点検･評価の客観性･妥当性を確保する仕組み

自己点検・評価の客観性・妥当性を確保するためには学外者の評価が必要と考えられる。今後確立する自己点検・評価の恒常的なシステムにおいて学外の専門的研究者などによる評価を考えている。ただし、慶應義塾大学医学研究科が掲げる「理念・目的・教育目標」に十分な理解と寛容をもった学外評価者を探すことがきわめて重要であり、画一的な意見をもつ学外評価者により当医学研究科の独自性や個性が失われることを避けたいと考えている。

(4)　自己点検･評価の結果の学外への発信状況

医学研究科（医学部）独自では現在のところ考えていない。

XV　卒業生との関わり

(1)　卒業生の状況把握（就職先企業、現住所、同窓会活動など）

(2)　社中の一員としての協力・貢献（寄付、在校生支援、評議員など）

(3)　義塾から卒業生に対するサービス（社会人教育、招待など）

(4)　その他（学会等）

慶應医学会の発行する「慶應医学」や医学部は英文雑誌（The Keio Journal of Medicine）、公開シンポジウムなども卒業生に最新の医学情報を伝える手段となっている。

以　上

設置授業科目と担当者

生 理 系

解 剖 学

	(授業科目)	(単位)	(担 当 者)		
〔主科目〕	解剖学特論	2	教 授	相磯貞和	(医 博)
			教 授	仲嶋一範	(医 博)
	解剖学演習	3	教 授	仲嶋一範	(博(医))
	解剖学実習	１０	教 授	今西宣晶	(医 博)
	組織学特論	1	教 授	相磯貞和	(医 博)
	組織学演習	1	教 授	相磯貞和	(医 博)
	組織学実習	3	専任講師	平岡芳樹	(理 博)
	発生学特論	1	教 授	仲嶋一範	(博(医))
	発生学演習	1	教 授	仲嶋一範	(博(医))
	発生学実習	2	専任講師	平岡芳樹	(理 博)
	神経解剖学	1	教 授	仲嶋一範	(博(医))
	神経解剖学演習	1	教 授	仲嶋一範	(博(医))
	神経解剖学実習	2	教 授	仲嶋一範	(博(医))
〔副科目〕	発生生理学	3	教 授	相磯貞和	(医 博)
	生理学特論	1	教 授	柚崎通介	(医 博)
	生理学実習	1	教 授	柚崎通介	(医 博)
			専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	病理学特論	1	教 授	岡田保典	(医 博)
	病理学実習	1	教 授	坂元亨宇	(博(医))
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

生 理 学

	(授業科目)	(単位)	(担 当 者)		
〔主科目〕	生理学（第一）特論	3	教 授	柚崎通介	(医 博)
	生理学（第一）演習	2	教 授	柚崎通介	(医 博)
	生理学（第一）実習	8	教 授	柚崎通介	(医 博)
	生理学（第二）特論	3	教 授	岡野栄之	(医 博)
	生理学（第二）演習	2	教 授	岡野栄之	(医 博)
	生理学（第二）実習	8	専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	電気生理学	2	教 授	柚崎通介	(医 博)
	電気生理学実習	2	教 授	柚崎通介	(医 博)
	化学生理学	2	専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	機能生化学実習	2	専任講師	岡野洋尚	(博(医))

〔副科目〕	神経解剖学	2	教　授	仲嶋一範	(博(医))
	神経解剖学実習	2	教　授	仲嶋一範	(博(医))
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	医化学実習	2	専任講師	合田亘人	(博(医))
	薬理学特論	2			
	薬理学実習	2			
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	(医　博)
	臨床生理学	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	生理学汎論	2			
	生物統計学	2	専任講師	島田直樹	(医　博)
	核医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	内分泌学特論	2			
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

医　化　学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	酵素化学特論	3	教　授	末松　誠	(博(医))
	酵素化学演習	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	酵素化学実習	8	専任講師	三谷芙美子	(医　博)
	医化学特論	3	教　授	末松　誠	(博(医))
	医化学演習	2	助教授	島田秀夫	(医　博)
	医化学実習	8	専任講師	合田亘人	(博(医))
〔副科目〕	生理学特論	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	生理学演習	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(農　博)
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	(理　博)
	分子生物学実習	2	専任講師	蓑島伸生	(医　博)
	薬理学特論	2			
	薬理学実習	2			
	内科学特論	2			
			教　授	猿田享男	(医　博)
			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	内科学演習	2			
			教　授	猿田享男	(医　博)
			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)

	医学当別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

分子生物学

	(授業科目)	(単位)		(担当者)	
〔主科目〕	分子生物学特論	3	教授	清水信義	(理 博)
	分子生物学演習	2	教授	清水信義	(理 博)
	分子生物学実習	8	助教授	蓑島伸生	(理 博)
	遺伝子医学特論	3	教授	清水信義	(理 博)
	遺伝子医学演習	2	教授	清水信義	(理 博)
	遺伝子医学実習	8	専任講師	工藤 純	(理 博)
〔副科目〕	発生学特論	2	教授	相磯貞和	(医 博)
	発生学演習	2	教授	相磯貞和	(医 博)
	生理学特論	2	教授	岡野栄之	(医 博)
	生理学演習	2	教授	岡野栄之	(医 博)
	医化学特論	2	教授	末松 誠	(博(医))
	医化学演習	2	助教授	島田秀夫	(理 博)
	病理学特論	2	教授	岡田保典	(医 博)
	病理学演習	2	教授	岡田保典	(医 博)
	微生物学特論	2	教授	石川博通	(医 博)
	微生物学演習	2	教授	石川博通	(医 博)
	ウイルス学特論	2	助教授	松尾光一	(医 博)
	免疫学特論	2	教授	小安重夫	(理 博)
	薬理学特論	2			
	医学特別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

薬理学

	(授業科目)	(単位)		(担当者)	
〔主科目〕	薬理学特論	8			
	薬理学演習	6			
	薬理学実習	12			
〔副科目〕	医化学特論	4	教授	末松 誠	(博(医))
	医化学実習	4	専任講師	合田亘人	(博(医))
	生理学特論	1	教授	柚崎通介	(医 博)
	生理学実習	1	教授	柚崎通介	(医 博)
			専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	毒性学特論	2			
	臨床薬理学	2			
			教授	猿田享男	(医 博)
	医学特別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

先端医科学

	（授業科目）	（単位）	（担　当　者）		
〔主科目〕	先端医科学（第一）特論	3	教　授	河上　裕	（博（医））
	先端医科学（第一）演習	2	教　授	河上　裕	（博（医））
	先端医科学（第一）実習	8	教　授	河上　裕	（博（医））
	先端医科学（第二）特論	3			
	先端医科学（第二）演習	2			
	先端医科学（第二）実習	8			
〔副科目〕	発生学特論	2	教　授	相磯貞和	（医　博）
	発生学演習	2	教　授	仲嶋一範	（博(医)）
	生理学特論	2	教　授	柚崎通介	（医　博）
	生理学演習	2	教　授	柚崎通介	（医　博）
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	（博(医)）
	医化学演習	2	助教授	島田秀夫	（医　博）
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	（理　博）
	分子生物学演習	2	教　授	清水信義	（理　博）
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	（医　博）
	病理学演習	2	教　授	岡田保典	（医　博）
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	（医　博）
	微生物学演習	2	教　授	石川博通	（医　博）
	ウイルス学特論	2	助教授	松尾光一	（医　博）
	免疫学特論	2	教　授	小安重夫	（理　博）
	薬理学特論	2	助教授	松岡正明	（医　博）
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

構造生物学

	（授業科目）	（単位）	（担　当　者）		
〔主科目〕	構造生物学特論	6			
	構造生物学特論	4			
	構造生物学特論	16			
〔副科目〕	発生学特論	2	教　授	相磯貞和	（医　博）
	発生学演習	2	教　授	仲嶋一範	（博(医)）
	生理学特論	2	教　授	柚崎通介	（医　博）
	生理学演習	2	教　授	柚崎通介	（医　博）
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	（博(医)）
	医化学演習	2	助教授	島田秀夫	（医　博）
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	（理　博）
	分子生物学演習	2	教　授	清水信義	（理　博）

病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
病理学演習	2	教　授	岡田保典	(医　博)
微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
微生物学演習	2	教　授	石川博通	(医　博)
ウイルス学特論	2	助教授	松尾光一	(医　博)
免疫学特論	2	教　授	小安重夫	(理　博)
薬理学特論	2			
医学特別講義	3	研究科委員全員		
その他許可を得た科目	5			

発生・分化生物学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	発生・分化生物学特論	6	教　授	須田年生	(医　博)
	発生・分化生物学演習	4	教　授	須田年生	(医　博)
	発生・分化生物学実習	16	教　授	須田年生	(医　博)
〔副科目〕	発生学特論	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
	発生学演習	2	教　授	仲嶋一範	(博(医))
	生理学特論	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	生理学演習	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	医化学演習	2	助教授	島田秀夫	(医　博)
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	(理　博)
	分子生物学演習	2	教　授	清水信義	(理　博)
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学演習	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学演習	2	教　授	石川博通	(医　博)
	ウイルス学特論	2	助教授	松尾光一	(医　博)
	免疫学特論	2	教　授	小安重夫	(理　博)
	薬理学特論	2			
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

薬剤学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	薬剤学特論	6	教　授	谷川原祐介	(薬　博)
	薬剤学演習	4	教　授	谷川原祐介	(薬　博)
	薬剤学実習	16	助教授	森田邦彦	(薬　博)
〔副科目〕	薬理学特論	2			
	薬理学演習	2			
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	医化学演習	2	助教授	島田秀夫	(医　博)

生理学特論	2	教授	岡野栄之	(医 博)
		教授	柚崎通介	(医 博)
生理学演習	2	教授	岡野栄之	(医 博)
		教授	柚崎通介	(医 博)
分子生物学特論	2	教授	清水信義	(理 博)
分子生物学演習	2	教授	清水信義	(理 博)
生物統計学	2	専任講師	島田直樹	(博(医))
内科学特論	2	専任講師	天野隆弘	(医 博)
		教授	猿田享男	(医 博)
		教授	小川 聡	(医 博)
		教授	池田康夫	(医 博)
内科学演習	2	教授	猿田康夫	(医 博)
		教授	小川 聡	(医 博)
		教授	池田康夫	(医 博)
小児科学特論	2	教授	高橋孝雄	(医 博)
小児科学演習	2	教授	高橋孝雄	(医 博)
臨床薬理学	2	教授		
医学特別講義	3	研究科委員全員		
その他許可を得た科目	5			

病 理 系

病 理 学

	(授業科目)	(単位)	(担 当 者)		
〔主科目〕	病理学(第一)特論	3	教授	岡田保典	(医 博)
	病理学(第一)演習	2	教授	岡田保典	(医 博)
	病理学(第一)実習	8	助教授	向井万起男	(医 博)
	病理学(第二)特論	3	教授	坂元亨宇	(博(医))
	病理学(第二)演習	2	教授	坂元亨宇	(博(医))
	病理学(第二)実習	8	教授	坂元亨宇	(博(医))
〔副科目〕	組織学特論	2	教授	相磯貞和	(医 博)
	組織学実習	2	専任講師	平岡芳樹	(医 博)
	医化学特論	2	教授	末松 誠	(博(医))
	医化学実習	2	専任講師	合田亘人	(博(医))
	生理学特論	2	教授	柚崎通介	(医 博)
	生理学実習	2	教授	柚崎通介	(医 博)
			専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	微生物学特論	3	教授	石川博通	(医 博)

微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(農　博)
法医学特論	2	教　授	村井達哉	(医　博)
法医学実習	2	専任講師	篠塚達雄	(医　博)
寄生蠕虫学特論	1	教　授	竹内　勤	(医　博)
寄生蠕虫学実習	1	専任講師	田辺将信	(医　博)
寄生原虫学特論	1	教　授	竹内　勤	(医　博)
寄生原虫学実習	1	専任講師	浅井隆志	(医　博)
内科学特論	2	教　授	猿田享男	(医　博)
		教　授	小川　聡	(医　博)
		教　授	池田康夫	(医　博)
外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
		教　授	四津良平	(医　博)
		教　授	河瀬　斌	(医　博)
		教　授	小林紘一	(医　博)
腫瘍学	2	教　授	岡田保典	(医　博)
医学特別講義	3	研究科委員全員		
その他許可を得た科目	5			

熱帯医学・寄生虫学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	寄生蠕虫学特論	2	教　授	竹内　勤	(医　博)
	寄生蠕虫学演習	1	教　授	竹内　勤	(医　博)
	寄生蠕虫学実習	7	専任講師	田辺将信	(医　博)
	寄生原虫学特論	2	教　授	竹内　勤	(医　博)
	寄生原虫学演習	4	教　授	竹内　勤	(医　博)
	寄生原虫学実習	6	専任講師	浅井隆志	(博(医))
	熱帯医学特論	2	教　授	竹内　勤	(医　博)
	熱帯医学演習	1	専任講師	浅井隆志	(博(医))
	熱帯医学実習	4	専任講師	田辺将信	(医　博)
〔副科目〕	生理学特論	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	生理学実習	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
			専任講師	岡野洋尚	(医　博)
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学実習	2	教　授	坂元亨宇	(博(医))
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(農　博)
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	薬理学特論	2			
	内科学特論	2	教　授	猿田享男	(医　博)

			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	小児科学特論	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

法　医　学

	(授業科目)	(単位)	(担　当　者)		
〔主科目〕	基礎法医学特論	3	教　授	村井達哉	(医　博)
	基礎法医学演習	2	教　授	村井達哉	(医　博)
	基礎法医学実習	8	専任講師	篠塚達雄	(薬　博)
	応用法医学特論	3	教　授	村井達哉	(医　博)
	応用法医学演習	2	教　授	村井達哉	(医　博)
	応用法医学実習	8	専任講師	篠塚達雄	(薬　博)
〔副科目〕	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学演習	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(農　博)
	内科学特論	2	教　授	猿田享男	(医　博)
			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
	産婦人科学特論	2	教　授	野澤志朗	(医　博)
	精神医学特論	2	教　授	鹿島晴雄	(医　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

微生物学・免疫学

	(授業科目)	(単位)	(担　当　者)		
〔主科目〕	微生物学特論	3	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学演習	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	8	専任講師	西沢正文	(農　博)
	ウイルス学特論	3	助教授	松尾光一	(医　博)
	ウイルス学演習	2	助教授	松尾光一	(医　博)
	ウイルス学実習	8	専任講師	瀬川　薫	(理　博)
	免疫学特論	3	教　授	小安重夫	(理　博)
	免疫学演習	2	教　授	小安重夫	(理　博)
	免疫学実習	8	専任講師	松田達志	(理　博)

〔副科目〕	生理学特論	2	教授	柚崎通介	(医 博)
	生理学実習	2	教授	柚崎通介	(医 博)
			専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	医化学特論	2	教授	末松 誠	(博(医))
	医化学実習	2	専任講師	合田亘人	(博(医))
	病理学特論	2	教授	岡田保典	(医 博)
	病理学実習	2	教授	坂元亨宇	(博(医))
	公衆衛生学特論	2	教授	大前和幸	(医 博)
	公衆衛生学実習	2	教授	大前和幸	(医 博)
	薬理学特論	2			
	内科学特論	2	教授	猿田享男	(医 博)
			教授	小川 聡	(医 博)
			教授	池田康夫	(医 博)
	小児科学特論	2	教授	高橋孝雄	(医 博)
	外科学特論	2	教授	北島政樹	(医 博)
			教授	四津良平	(医 博)
			教授	河瀬 斌	(医 博)
			教授	小林紘一	(医 博)
	医学特別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

予防医学系

衛生学公衆衛生学

(授業科目)		(単位)	(担 当 者)		
〔主科目〕	環境衛生学特論	2	教授	大前和幸	(医 博)
	環境衛生学演習	4	教授	大前和幸	(医 博)
	環境衛生学実習	6	教授	大前和幸	(医 博)
	公衆衛生学特論	2	教授	大前和幸	(医 博)
	公衆衛生学演習	4	教授	大前和幸	(医 博)
	公衆衛生学実習	6	教授	大前和幸	(医 博)
	生物統計学	2	専任講師	島田直樹	(博(医))
	生物統計学実習	2	専任講師	武林 亨	(博(医))
〔副科目〕	寄生蠕虫学特論	1	教授	竹内 勤	(医 博)
	寄生蠕虫学実習	1	専任講師	田辺将信	(医 博)
	寄生原虫学特論	1	教授	竹内 勤	(医 博)
	寄生原虫学実習	1	専任講師	浅井隆志	(医 博)
	微生物学特論	2	教授	石川博通	(医 博)
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(農 博)
	生理学特論	2	教授	柚崎通介	(医 博)
	医化学特論	2	教授	末松 誠	(博(医))

法医学特論	2	教授	村井達哉	(医 博)
医療政策・管理学特論	2	教授	池上直己	(医 博)
内科学特論	2	教授	猿田享男	(医 博)
		教授	小川 聡	(医 博)
		教授	池田康夫	(医 博)
小児科学特論	2	教授	高橋孝雄	(医 博)
産婦人科学特論	2	教授	野澤志朗	(医 博)
医学特別講義	3	研究科委員全員		
その他許可を得た科目	5			

医療政策・管理学

	(授業科目)	(単位)		(担 当 者)	
〔主科目〕	医療政策・管理学	2			
	(第一) 特論				
	医療政策・管理学	2	教授	池上直己	(医 博)
	(第二) 特論				
	医療政策・管理学	10	教授	池上直己	(医 博)
	(第二) 実習	8	専任講師	池田俊也	(博(医))
	医療 (第一) 特論	2			
	医療 (第二) 特論	2	教授	池上直己	(医 博)
〔副科目〕	公衆衛生学特論	2	教授	大前和幸	(医 博)
	公衆衛生学実習	2	教授	大前和幸	(医 博)
	生物統計学	2	専任講師	島田直樹	(博(医))
	生物統計学実習	2	専任講師	武林 亨	(博(医))
	精神保健学特論	1	教授	鹿島晴雄	(医 博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

内科系

内科学

	(授業科目)	(単位)		(担 当 者)	
〔主科目〕	内科学 (第一) 特論	2	教授		
	内科学 (第一) 演習	1	教授		
	内科学 (第一) 実習	4	専任講師	天野隆弘	(医 博)
	内科学 (第二) 特論	2	教授	猿田享男	(医 博)
	内科学 (第二) 演習	1	教授	猿田享男	(医 博)
	内科学 (第二) 実習	4	助教授	林 松彦	(医 博)
	内科学 (第三) 特論	2			
	内科学 (第三) 演習	1			

	内科学（第三）実習	4	助教授	永田博司	（医　博）
	内科学（第四）特論	2	教　授	小川　聡	（医　博）
	内科学（第四）演習	1	教　授	小川　聡	（医　博）
	内科学（第四）実習	4	助教授	山口佳寿博	（医　博）
	内科学（第五）特論	2	教　授	池田康夫	（医　博）
	内科学（第五）演習	1	教　授	池田康夫	（医　博）
	内科学（第五）実習	4	助教授	岡本真一郎	（医　博）
			専任講師	木崎昌弘	（医　博）
	診断・治療学	2	助教授	林　松彦	（医　博）
	食養学特論	2			
〔副科目〕	生理学特論	2	教　授	柚崎通介	（医　博）
	生理学実習	2	教　授	柚崎通介	（医　博）
			専任講師	岡野洋尚	（医　博）
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	（博(医)）
	医化学実習	2	専任講師	合田亘人	（博(医)）
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	（医　博）
	病理学実習	2	教　授	坂元亨宇	（博(医)）
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	（医　博）
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	（農　博）
	放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	（医　博）
	放射線医学実習	2	教　授	久保敦司	（医　博）
	公衆衛生学特論	2	教　授	大前和幸	（医　博）
	臨床麻酔学特論	2	教　授	武田純三	（医　博）
	麻酔生理学実習	2	教　授	武田純三	（医　博）
	薬理学特論	2			
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	（医　博）
			教　授	四津良平	（医　博）
			教　授	河瀬　斌	（医　博）
			教　授	小林紘一	（医　博）
	小児科学特論	2	教　授	高橋孝雄	（医　博）
	眼科学特論	2			
	皮膚科学特論	2	教　授	西川武二	（医　博）
	泌尿器科学特論	2	教　授	村井　勝	（医　博）
	精神医学特論	2	教　授	鹿島晴雄	（医　博）
	医学特別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

小児科学

	（授業科目）	（単位）		（担　当　者）	
〔主科目〕	小児科学特論	4	教　授	高橋孝雄	（医　博）
	小児科学演習	2	教　授	高橋孝雄	（医　博）
	小児科学実習	8	専任講師	粟津　緑	（医　博）

			専任講師	渡辺久子	(医　博)
	小児科診断学特論	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
	小児科診断学演習	2			
	小児科診断学実習	8	助 教 授	小崎健次郎	(医　博)
	小児科治療学特論	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
	小児科治療学演習	2	専任講師	山岸敬幸	(医　博)
	小児科治療学実習	2	助 教 授	長谷川奉延	(医　博)
〔副科目〕	生 理 学 特 論	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	生 理 学 実 習	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
			専任講師	岡野洋尚	(医　博)
	病 理 学 特 論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病 理 学 実 習	2	教　授	坂元亨宇	(博(医))
	医 化 学 特 論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	医 化 学 実 習	2	専任講師	合田亘人	(博(医))
	微 生 物 学 特 論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微 生 物 学 実 習	2	専任講師	西沢正文	(農　博)
	薬 理 学 特 論	2			
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	(医　博)
	公衆衛生学特論	2	教　授	大前和幸	(医　博)
	放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	臨床麻酔学特論	2	教　授	武田純三	(医　博)
	医 学 特 別 講 義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

精神神経科学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	精 神 医 学 特 論	3	教　授	鹿島晴雄	(医　博)
	精 神 医 学 演 習	2	助 教 授	加藤元一郎	(医　博)
	精 神 医 学 実 習	6	専任講師	濱田秀伯	(医　博)
			専任講師	水野雅文	(博(医))
	精神保健学特論	2	教　授	鹿島晴雄	(医　博)
	精神保健学演習	2	助 教 授	加藤元一郎	(医　博)
	精神保健学実習	4	専任講師	村松太郎	(博(医))
			専任講師	白波瀬丈一郎	(博(医))
	神 経 病 学 特 論	1	教　授	鹿島晴雄	(医　博)
	神 経 病 学 演 習	2	教　授	鹿島晴雄	(医　博)
	神 経 病 学 実 習	4	専任講師	濱田秀伯	(医　博)
〔副科目〕	生 理 学 特 論	3	教　授	柚崎通介	(医　博)
	神経病理学特論	3	教　授	岡田保典	(医　博)
	薬 理 学 特 論	3			
	医 化 学 特 論	3	教　授	末松　誠	(博(医))
	神 経 解 剖 学	3	教　授	仲嶋一範	(博(医))

脳神経外科学特論	3	教　授	河瀬　斌	(医　博)
内科学特論	3	教　授	猿田享男	(医　博)
		教　授	小川　聡	(医　博)
		教　授	池田康夫	(医　博)
内科学演習	3	教　授	猿田康夫	(医　博)
		教　授	小川　聡	(医　博)
		教　授	池田康夫	(医　博)
小児科学特論	3	教　授	高橋孝雄	(医　博)
医学特別講義	3		研究科委員全員	
その他許可を得た科目	5			

皮膚科学

	(授業科目)	(単位)		(担当者)	
〔主科目〕	皮膚科学特論	4	教　授	西川武二	(医　博)
	皮膚科学演習	2	教　授	西川武二	(医　博)
	皮膚科学実習	2	助教授	田中　勝	(医　博)
	皮膚科診断学特論	2	助教授	田中　勝	(医　博)
	皮膚科治療学特論	2	専任講師	谷川暎子	(医　博)
	皮膚病理学特論	2	教　授	西川武二	(医　博)
	皮膚病理学演習	2	助教授	田中　勝	(医　博)
	皮膚病理学実習	2	専任講師	石河　晃	(医　博)
	皮膚病因学特論	2	教　授	西川武二	(医　博)
	皮膚病因学演習	2	専任講師	天谷雅行	(医　博)
	皮膚免疫・ｱﾚﾙｷﾞｰ学特論	2	教　授	西川武二	(医　博)
	分子皮膚科学特論	2	専任講師	天谷雅行	(医　博)
〔副科目〕	解剖学特論	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	分子生物学特論	2	教　授	清水信義	(医　博)
	薬理学特論	2	教　授		
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学実習	2	教　授	坂元亨宇	(博(医))
	熱帯医学特論	2	教　授	竹内　勤	(医　博)
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	免疫学特論	2	教　授	小安重夫	(理　博)
	内科学特論	2	専任講師	天野隆弘	(医　博)
		2	教　授	猿田享男	(医　博)
		2	助教授	永田博司	(医　博)
		2	教　授	小川　聡	(医　博)
		2	教　授	池田康夫	(医　博)
	内科学実習	2	助教授	林　松彦	(医　博)

	2	助教授	山口佳寿博	(医　博)
	2	助教授	岡本真一郎	(医　博)
	2	専任講師	長谷川直樹	(医　博)
	2	専任講師	棚橋紀夫	(医　博)
	2	専任講師	木崎昌弘	(医　博)
小児科学特論	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
形成外科学特論	2	教　授	中島龍夫	(医　博)
形成外科学実習	2	助教授	中嶋英雄	(医　博)
医学特別講義	3		研究科委員全員	
その他許可を得た科目	5			

放射線医学

(授業科目)		(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	放射線物理特論	1	教　授	久保敦司	(医　博)
	放射線管理学特論	1	教　授	久保敦司	(医　博)
	画像診断学特論	4	教　授	栗林幸夫	(医　博)
	画像診断学演習	4	教　授	栗林幸夫	(医　博)
			専任講師	杉野吉則	(医　博)
	画像診断学実習	4	専任講師	橋本　統	(医　博)
	放射線腫瘍学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	放射線腫瘍学演習	2	助教授	安藤　裕	(医　博)
	放射線腫瘍学実習	2	専任講師	茂松直之	(医　博)
	核医学特論	1	教　授	久保敦司	(医　博)
	核医学演習	1	教　授	久保敦司	(医　博)
	核医学実習	1	専任講師	中村佳代子	(理　博)
〔副科目〕	内科学特論	2	教　授	猿田享男	(医　博)
			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	内科学実習	2	助教授	林　松彦	(医　博)
			助教授	山口佳寿博	(医　博)
			助教授	永田博司	(医　博)
			助教授	岡本慎一郎	(医　博)
			専任講師	天野隆弘	(医　博)
			専任講師	木崎昌弘	(医　博)
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
	外科学実習	2	専任講師	久保田哲朗	(医　博)

		教　授	四津良平	(医　博)
		専任講師	饗庭　了	(医　博)
		教　授	小林紘一	(医　博)
産婦人科学特論	2	教　授	野澤志朗	(医　博)
産婦人科学実習	2	教　授	吉村泰典	(医　博)
耳鼻咽喉科学特論	2	教　授	小川　郁	(医　博)
解剖学特論	2	教　授	仲嶋一範	(医　博)
		教　授	相磯貞和	(医　博)
病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
生理学特論	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
公衆衛生学特論	2	教　授	大前和幸	(医　博)
医療政策・管理学特論	2	教　授	池上直己	(医　博)
整形外科学特論	2	教　授	戸山芳昭	(医　博)
泌尿器科学特論	2	教　授	村井　勝	(医　博)
小児科学特論	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
医学特別講義	3	研究科委員全員		
その他許可を得た科目	5			

老年科学

	(授業科目)	(単位)	(担　当　者)
〔主科目〕	老年科学（第一）特論	4	
	老年科学（第一）演習	3	
	老年科学（第一）実習	8	
	老年科学（第二）演習	3	
	老年科学（第二）実習	8	
〔副科目〕	生理学特論	2	
	医化学特論	2	
	薬理学特論	2	
	病理学特論	2	
	内科学（第一）特論	2	
	内科学（第二）特論	2	
	内科学（第三）特論	2	
	内科学（第四）特論	2	
	内科学（第五）特論	2	
	精神医学特論	3	
	医学特別講義	3	
	その他許可を得た科目	5	

リハビリテーション医学

	(授業科目)	(単位)	(担　当　者)
〔主科目〕	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学特論	5	

	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学演習	5			
	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学実習	１０	教　　授	里宇明元	(博(医))
			専任講師	長谷公隆	(博(医))
	臨床電気診断学特論	3			
	臨床電気診断学実習	3	教　　授	里宇明元	(博(医))
			専任講師	長谷公隆	(博(医))
〔副科目〕	解剖学特論	2	教　　授	仲嶋一範	(博(医))
	解剖学実習	2	教　　授	相磯貞和	(医　博)
	生理学特論	2			
	生理学実習	2			
			専任講師	岡野洋尚	(医　博)
	病理学特論	2	教　　授	岡田保典	(医　博)
	病理学実習	2	助教授	向井万起男	(医　博)
	医学特別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

臨床検査医学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	臨床検査医学特論	6	教　　授	渡辺清明	(医　博)
	臨床検査医学特論	8	教　　授	渡辺清明	(医　博)
	臨床検査医学特論	12	専任講師	川合陽子	(医　博)
			専任講師	菊池春人	(博(医))
〔副科目〕	医化学特論	2	教　　授	末松　誠	(博(医))
	医化学実習	2	教　　授	末松　誠	(博(医))
	微生物学特論	2	教　　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(農　博)
	分子生物学特論	2	教　　授	清水信義	(理　博)
	分子生物学演習	2	教　　授	清水信義	(理　博)
	薬理学特論	2			
	病理学特論	2	教　　授	岡田保典	(医　博)
	病理学演習	2	教　　授	岡田保典	(医　博)
	内科学特論	2	教　　授	猿田享男	(医　博)
			教　　授	小川　聡	(医　博)
			教　　授	池田康夫	(医　博)
	内科学演習	2	教　　授	猿田享男	(医　博)
			教　　授	小川　聡	(医　博)
			教　　授	池田康夫	(医　博)
	小児科学特論	2	教　　授	高橋孝雄	(医　博)
	産婦人科学特論	2	教　　授	野澤志朗	(医　博)
	医学特別講義	3			

その他許可を得た科目　5

外科系

外科学

	（授業科目）	（単位）	（担当者）	
〔主科目〕	外科学（第一）特論	3	教授	北島政樹　（医　博）
	外科学（第一）演習	2	教授	北島政樹　（医　博）
	外科学（第一）実習	8	助教授	久保田哲朗　（医　博）
	外科学（第二）特論	3	教授	四津良平　（医　博）
	外科学（第二）演習	2	教授	四津良平　（医　博）
	外科学（第二）実習	8	専任講師	饗庭　了　（医　博）
	外科学（第三）特論	3	教授	河瀬　斌　（医　博）
	外科学（第三）演習	2	教授	河瀬　斌　（医　博）
	外科学（第三）実習	8	教授	河瀬　斌　（医　博）
	外科学（第四）特論	3	教授	小林紘一　（医　博）
	外科学（第四）演習	2	教授	小林紘一　（医　博）
	外科学（第四）実習	8	教授	小林紘一　（医　博）
	外科手術学特論	2	教授	北島政樹　（医　博）
	外科手術学実習	2	教授	北島政樹　（医　博）
	臨床麻酔学特論	2	教授	武田純三　（医　博）
	臨床麻酔学実習	2	教授	武田純三　（医　博）
〔副科目〕	解剖学特論	2	教授	相磯貞和　（医　博）
			教授	仲嶋一範　（博(医)）
	解剖学実習	2	専任講師	今西宣晶　（医　博）
	生理学特論	2	教授	柚崎通介　（医　博）
	生理学実習	2	教授	柚崎通介　（医　博）
			専任講師	岡野洋尚　（医　博）
	病理学特論	2	教授	岡田保典　（医　博）
	病理学実習	2	教授	坂元亨宇　（博(医)）
	放射線医学特論	2	教授	久保敦司　（医　博）
	放射線医学実習	2	教授	久保敦司　（医　博）
	臨床腫瘍学	2	教授	北島政樹　（医　博）
	医化学特論	2	教授	末松　誠　（博(医)）
	薬理学特論	2	教授	
	微生物学特論	2	教授	石川博通　（医　博）
	内科学特論	2		
			教授	猿田享男　（医　博）

			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	神経解剖学	2	教　授	仲嶋一範	(博(医))
	神経生理学	2	教　授	柚崎通介	(医　博)
	神経病理学	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	神経病学	2	教　授	鹿島晴雄	(医　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

整形外科学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	整形外科学特論	3	教　授	戸山芳昭	(医　博)
	整形外科学演習	3	教　授	戸山芳昭	(医　博)
	整形外科学実習	12	教　授	戸山芳昭	(医　博)
			助教授	松本秀男	(医　博)
			専任講師	矢部啓夫	(医　博)
	整形外科手術学特論	2	専任講師	矢部啓夫	(医　博)
	整形外科手術学実習	4	専任講師	矢部哲夫	(医　博)
	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学特論	2	教　授	里宇明元	(医　博)
	ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ医学実習	4	教　授	里宇明元	(医　博)
〔副科目〕	解剖学特論	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
			教　授	仲嶋一範	(博(医))
	解剖学実習	2	専任講師	今西宣晶	(医　博)
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
			教　授	坂元亨宇	(博(医))
	病理学実習	2	助教授	向井万起男	(医　博)
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
	外科学実習	2	教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
			助教授	久保田哲朗	(医　博)
			専任講師	饗庭　了	(医　博)
	臨床麻酔学特論	2	教　授	武田純三	(医　博)
	臨床麻酔学実習	2	教　授	武田純三	(医　博)
	放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	放射線医学実習	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

眼　科　学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	眼　科　学　特　論	2			
	眼　科　学　演　習	2			
	眼　科　学　実　習	10			
			助 教 授	真島行彦	(医　博)
			専任講師	山田昌和	(博(医))
			専任講師	黒坂大次郎	(博(医))
			専任講師	安藤靖恭	(博(医))
			専任講師	根岸一乃	(博(医))
	眼　科　治　療　学	3			
	眼科治療学実習				
〔副科目〕	生　理　学　特　論	2	教　　授	岡野栄之	(医　博)
		2	教　　授	岡野栄之	(医　博)
	生　理　学　実　習	2	教　　授	柚崎通介	(医　博)
			専任講師	岡野洋尚	(医　博)
	医　化　学　特　論	2	教　　授	末松　誠	(博(医))
	医　化　学　実　習	2	専任講師	合田亘人	(博(医))
	病　理　学　特　論	2	教　　授	岡田保典	(医　博)
	病　理　学　実　習	2	助 教 授	向井万起男	(医　博)
			教　　授	坂元亨宇	(博(医))
	分子生物学特論	2	教　　授	清水信義	(医　博)
	分子生物学実習	2	助 教 授	蓑島伸生	(医　博)
			専任講師	工藤　純	(理　博)
	医　学　特　別　講　義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

耳鼻咽喉科学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	耳鼻咽喉科学特論	3	教　　授	小川　郁	(博(医))
	耳鼻咽喉科学演習	2	教　　授	小川　郁	(博(医))
	耳鼻咽喉科学実習	10	教　　授	小川　郁	(博(医))
			専任講師	國弘幸伸	(博(医))
	気管食道科学特論	2	専任講師	塩谷彰浩	(医　博)
	気管食道科学演習	2	専任講師	塩谷彰浩	(医　博)
	気管食道科学実習	4	専任講師	塩谷彰浩	(医　博)
	音声言語医学特論	2	専任講師	佐藤美奈子	(博(医))
	音声言語医学演習	1	専任講師	佐藤美奈子	(博(医))
	音声言語医学実習	2	専任講師	佐藤美奈子	(博(医))
〔副科目〕	生　理　学　実　習	2	教　　授	石川通介	(医　博)
	生　理　学　実　習	2	教　　授	石川通介	(医　博)

			専任講師	岡野洋尚	(医　博)
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学実習	2	教　授	坂元亨宇	(博(医))
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	2	専任講師	西沢正文	(理　博)
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
	外科学実習	2	教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
			助教授	久保田哲朗	(医　博)
			専任講師	(医　博)	
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

泌尿器科学

	(授業科目)	(単位)	(担　当　者)		
〔主科目〕	泌尿器科学特論	2	教　授	村井　勝	(医　博)
	泌尿器科学演習	4	教　授	村井　勝	(医　博)
	泌尿器科学実習	12	助教授	丸茂　健	(医　博)
			専任講師	中島　淳	(医　博)
	泌尿器手術学特論	2	専任講師	中島　淳	(医　博)
	泌尿器手術学実習	6	専任講師	大東貴志	(医　博)
			専任講師	大家基嗣	(医　博)
〔副科目〕	内科学特論	2	教　授		
			教　授	猿田享男	(医　博)
			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	内科学実習	2	助教授	林　松彦	(医　博)
			助教授	山口佳寿博	(医　博)
			助教授	永田博司	(医　博)
			助教授	岡本慎一郎	(医　博)
			専任講師	熊谷裕生	(医　博)
			専任講師	天野隆弘	(医　博)
			専任講師	木崎昌弘	(医　博)
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)

			教　授	小林紘一	(医　博)
	外科学実習	2	教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
			助教授	久保田哲朗	(医　博)
			専任講師	饗庭　了	(医　博)
	産婦人科学特論	2	教　授	野澤志朗	(医　博)
	産婦人科学実習	2	教　授	吉村泰典	(医　博)
	放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	放射線医学実習	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	解剖学特論	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
			教　授	仲嶋一範	(博(医))
	生理学特論	2	教　授	岡野栄之	(医　博)
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	臨床麻酔学特論	2	教　授	武田純三	(医　博)
	医学特別講義	3		研究科委員全員	
	その他許可を得た科目	5			

産婦人科学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	産婦人科学(第一)特論	3	教　授	野澤志朗	(医　博)
	産婦人科学(第一)演習	2	助教授	塚崎克己	(医　博)
	産婦人科学(第一)実習	8	専任講師	青木大輔	(医　博)
	産婦人科学(第二)特論	3	教　授	吉村泰典	(医　博)
	産婦人科学(第二)演習	2	助教授	末岡　浩	(医　博)
	産婦人科学(第二)実習	8	専任講師	久慈直昭	(医　博)
	産婦人科手術学特論	2	専任講師	久布白兼行	(医　博)
〔副科目〕	生理学特論	2	教　授	岡野栄之	(医　博)
	生理学実習	2	教　授	岡野栄之	(医　博)
			専任講師	岡野洋尚	(医　博)
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学実習	2	教　授	坂元亨宇	(博(医))
	内科学特論	2			
			教　授	猿田享男	(医　博)
			教　授	小川　聡	(医　博)
			教　授	池田康夫	(医　博)
	内科学実習	2	助教授	林　松彦	(医　博)
	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)

			教　授	小林紘一	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
	外科学実習	2	教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
			助教授	久保田哲朗	(医　博)
			専任講師	饗庭　了	(医　博)
	小児科学特論	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
	小児科学実習	2	教　授	高橋孝雄	(医　博)
			助教授	長谷川奉延	(医　博)
	泌尿器科学特論	2	教　授	村井　勝	(医　博)
	泌尿器科学実習	2	助教授	丸茂　健	(医　博)
	解剖学特論	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
			教　授	仲嶋一範	(博(医))
	発生学特論	2	教　授	仲嶋一範	(博(医))
	医化学特論	2	教　授	末松　誠	(博(医))
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	臨床麻酔学特論	2	教　授	武田純三	(医　博)
	放射線医学特論	2	教　授	久保敦司	(医　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

臨床麻酔学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	臨床麻酔学特論	3	教　授	武田純三	(医　博)
	臨床麻酔学演習	5	専任講師	山田達也	(医　博)
	臨床麻酔学実習	20	教　授	武田純三	(医　博)
	麻酔薬理学	2	専任講師	森崎　浩	(医　博)
	麻酔薬理学実習	2	教　授	武田純三	(医　博)
			助教授	津崎晃一	(医　博)
	麻酔生理学	2	教　授	武田純三	(医　博)
	麻酔生理学実習	2	教　授	武田純三	(医　博)
			専任講師	小竹良文	(医　博)
〔副科目〕	外科学特論	2	教　授	北島政樹	(医　博)
			教　授	四津良平	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
	外科学実習	2	教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
			助教授	久保田哲朗	(医　博)
			専任講師	饗庭　了	(医　博)

	生理学特論	2	教授	柚崎通介 (医 博)
	生理学実習	2	教授	柚崎通介 (医 博)
			専任講師	岡野洋尚 (医 博)
	薬理学特論	2	助教授	松岡正明 (博(医))
	薬理学実習	2	助教授	松岡正明 (博(医))
	医学特別講義	3		研究科委員全員
	その他許可を得た科目	5		

形成外科学

	(授業科目)	(単位)	(担当者)	
〔主科目〕	形成外科学特論	2	教授	中島龍夫 (医 博)
	形成外科学演習	2	専任講師	田中一郎 (博(医))
	形成外科学実習	8	助教授	中嶋英雄 (医 博)
			専任講師	田中一郎 (博(医))
	形成外科手術学特論	2	教授	中島龍夫 (医 博)
	形成外科手術学実習	5	助教授	中嶋英雄 (医 博)
			専任講師	田中一郎 (博(医))
	組織移植学特論	2	教授	中島龍夫 (医 博)
	組織移植学実習	5	助教授	中嶋英雄 (医 博)
			専任講師	田中一郎 (博(医))
〔副科目〕	解剖学特論	2	教授	相磯貞和 (医 博)
			教授	仲嶋一範 (博(医))
	解剖学実習	2	専任講師	今西宣晶 (医 博)
	病理学特論	2	教授	岡田保典 (医 博)
	病理学実習	2	教授	坂元亨宇 (博(医))
	外科学特論	2	教授	北島政樹 (医 博)
			教授	四津良平 (医 博)
			教授	河瀬 斌 (医 博)
			教授	小林紘一 (医 博)
	外科学実習	2	教授	河瀬 斌 (医 博)
			教授	小林紘一 (医 博)
			助教授	久保田哲朗 (医 博)
			専任講師	饗庭 了 (医 博)
	形成口腔外科学特論	2	専任講師	田中一郎 (博 (医))
	形成口腔外科学実習	2	助教授	中嶋英雄 (医 博)
			専任講師	田中一郎 (博 (医))
	生理学特論	2	教授	柚崎通介 (医 博)

免疫学特論	2	教授	石川博通	(医 博)
整形外科学特論	2	教授	戸山芳昭	(医 博)
耳鼻咽喉科学特論	2	教授	小川 郁	(博(医))
臨床麻酔学特論	2	教授	武田純三	(医 博)
医学特別講義	3		研究科委員全員	
その他許可を得た科目	5			

救急医学

	(授業科目)	(単位)		(担当者)	
〔主科目〕	救急医学特論	4	教授	相川直樹	(医 博)
	救急医学演習	2	教授	相川直樹	(医 博)
	救急医学実習	12	助教授	堀 進悟	(医 博)
			専任講師	藤島清太郎	(医 博)
	侵襲学特論	2	教授	相川直樹	(医 博)
	侵襲学実習	6	専任講師	藤島清太郎	(医 博)
〔副科目〕	生理学特論	6	教授	岡野栄之	(医 博)
			教授	柚崎通介	(医 博)
	生理学実習	6	教授	柚崎通介	(医 博)
			専任講師	岡野洋尚	(医 博)
	病理学特論	2	教授	岡田保典	(医 博)
			教授	坂元亨宇	(医(博))
	病理学実習	2	教授	坂元亨宇	(医(博))
			助教授	向井万起男	(医 博)
	応用法医学特論	2	教授	村井達哉	(医 博)
	応用法医学実習	2	教授	村井達哉	(医 博)
	公衆衛生学特論	2	教授	大前和幸	(医 博)
	生物統計学	2	専任講師	島田直樹	(博(医))
	内科学特論	2			
			教授	猿田享男	(医 博)
			教授	小川 聡	(医 博)
			教授	池田康夫	(医 博)
	内科学実習	2	専任講師	天野隆弘	(医 博)
			助教授	林 松彦	(医 博)
			助教授	永田博司	(医 博)
			助教授	山口佳寿博	(医 博)
			助教授	岡本真一郎	(医 博)
			専任講師	木崎昌弘	(医 博)
	外科学特論	2	教授	北島政樹	(医 博)
			教授	四津良平	(医 博)
			教授	河瀬 斌	(医 博)

			教　授	小林紘一	(医　博)
	外科学実習	2	助教授	久保田哲朗	(医　博)
			専任講師	饗庭　了	(医　博)
			専任講師	上田敏彦	(医　博)
			教　授	河瀬　斌	(医　博)
			教　授	小林紘一	(医　博)
	臨床麻酔学特論	2	教　授	武田純三	(医　博)
	臨床麻酔学実習	2	教　授	武田純三	(医　博)
	画像診断学特論	2	教　授	栗林幸夫	(医　博)
	画像診断学実習	2	専任講師	橋本　統	(医　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			

歯科口腔外科学

	(授業科目)	(単位)		(担　当　者)	
〔主科目〕	歯科口腔外科学特論	2	教　授	中川　種昭	(歯　博)
	歯科口腔外科学演習	4	教　授	中川　種昭	(歯　博)
	歯科口腔外科学実習	12	教　授	中川　種昭	(歯　博)
	歯科口腔外科手術学特論	2	助教授	朝波惣一郎	(医　博)
	歯科口腔外科手術学実習	6	助教授	朝波惣一郎	(医　博)
〔副科目〕	解剖学特論	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
	解剖学実習	2	教　授	相磯貞和	(医　博)
	病理学特論	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	病理学実習	2	教　授	岡田保典	(医　博)
	微生物学特論	2	教　授	石川博通	(医　博)
	微生物学実習	2	教　授	石川博通	(医　博)
	免疫学特論	2	教　授	小安重夫	(理　博)
	医学特別講義	3	研究科委員全員		
	その他許可を得た科目	5			